



SystemGlobe DeploymentManager

Ver2.3 Lite

ファーストステップガイド

目次

商標について	4
はじめに.....	5
導入編.....	7
1. DPM をインストールする前に.....	7
1.1 管理サーバの設定について.....	7
1.2 DPM で管理対象となるコンピュータの設定.....	8
1.3 ネットワークの設定	9
2. DPM のインストール.....	17
2.1 DPM のインストール.....	17
3. DPM を初めてお使いになる場合（初期導入時）.....	20
3.1 DPM の起動	20
3.2 DHCP サーバの設定	26
3.3 ガードパラメータの設定.....	26
4. DPM にコンピュータを登録するまで.....	28
4.1 グループの登録.....	28
4.2 収納ユニットの登録	29
4.3 コンピュータの登録	29
5. ICMB 接続について	33
基本操作編.....	36
1. Windows OS クリアインストール.....	37
1.1 OS イメージの登録.....	37
1.2 セットアップパラメータの作成	39
1.3 シナリオファイルの作成	43
1.4 シナリオ実行	46
2. サービスパック/HotFix の適用、アプリケーションのインストール.....	49
2.1 サービスパック/HotFix、アプリケーションの登録.....	49
2.2 シナリオの追加.....	51
3. RedHat Linux のインストール.....	53
3.1 NFS サービスのセットアップ.....	55
3.2 RedHat Linux インストール CD のコピー	55
3.3 DHCP サービスのセットアップ.....	57
3.4 Linux ブートファイルの準備	58
3.5 Linux ブートファイルの編集.....	60
3.6 シナリオファイルの作成	63
3.7 シナリオ実行	64
3.8 注意事項、その他	65
4. エージェントサービスのインストール.....	66
5. BIOS/ファームウェアのアップデート.....	68
5.1 イメージの登録.....	68

5.2 シナリオファイル作成.....	72
5.3 シナリオ実行.....	73
応用編	75
1. クライアント情報一括登録.....	75
1.1 コンピュータ情報インポート.....	75
1.2 コンピュータ情報エクスポート.....	77
2. 情報ファイル大量作成アシスト.....	79
3. シナリオ一括設定.....	82
3.1 シナリオ一括割当て.....	82
3.2 シナリオ一括実行.....	83
4. シナリオ作成時のオプション設定.....	84
4.1 シナリオ実行条件.....	84
5. シナリオ実行状況確認.....	86
5.1 シナリオ進行状況.....	86
5.2 シナリオ実行一覧.....	86
5.3 シナリオ実行結果一覧.....	88
6. 登録ツール.....	89

商標について

- ・ SystemGlobeは日本電気株式会社の登録商標です。
- ・ ESMPROは日本電気株式会社の登録商標です。
- ・ EXPRESSBUILDERは日本電気株式会社の商標です。
- ・ Microsoft、Windows、MS-DOSは米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- ・ DatalightはDatalight, Inc.の登録商標です。ROM-DOSはDatalight, Inc.の商標です。
(c) 1989-2001 Datalight, Inc., All Rights Reserved.
- ・ Red Hatは米国およびその他の国でRed Hat, Inc.の登録商標または商標です。
- ・ LinuxはLinus Torvalds 氏の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- ・ その他、記載の会社名および商品名は各社の登録商標または商標です。

はじめに

この度は、NEC の SystemGlobe DeploymentManager Ver2.3 Lite (以下、DPM と呼びます) をお買い求めいただき、まことにありがとうございます。

DPM は、以下の機能を提供し、Express5800/BladeServer、Express5800/Na の導入・管理のコストや時間を削減することができます。また、これらの作業状況は、管理サーバから簡単に確認することができます。

1. オペレーティングシステム (Windows、Linux) のクリア (新規) インストール
2. System BIOS やファームウェア等のアップデート
3. サービスパック、HotFix の適用 (1 の OS インストールと一緒に行ないます。)
4. ESMPRO/ServerAgent、エクスプレス通報サービスのインストール (1 の OS インストールと一緒に行います。)

「アプリケーションの登録」、「バックアップ/リストア」、「ディスク複製」、「シナリオ実行のスケジュール」、「クライアントからのシナリオ実行機能」の機能は Lite 版では使用できません。

DPM の機能には Windows と Linux とで以下の表のような違いがあります。

機能	Windows	Linux
ディスク複製インストール	1	×
OS クリアインストール		
OS クリアインストール時のパラメータ作成		×
サービスパック/HotFix の適用	2	×
アプリケーションのインストール	2 3	×
バックアップ/リストア	1	1
BIOS/ファームウェアのアップデート		
電源 ON		
シャットダウン		×
ICMB 未接続時の生存確認 (電源 ON/OFF の状態確認)		×
ICMB 接続時の生存確認 (電源 ON/OFF の状態確認)		
クライアントの OS/サービスパック/HotFix 情報取得		×
管理サーバ (DPM のインストール)		×

1 Lite 版では使用できません。

2 Lite 版では OS クリアインストールと同時に行う必要があります。

3 Lite 版では ESMPRO/ServerAgent、エクスプレス通報サービスのみインストールできます。

また、Linux マシンに対してシナリオ実行を行うには Linux マシンの電源が OFF であることが必要です。

本書は、以下の内容で構成されており、本書を使うことによって、マシンのセットアップから各機能を使用できるまでの流れが分かるようになっています。各項目の手順の詳細については、「SystemGlobe DeploymentManager Ver2.3 Lite ユーザーズガイド」を参照してください。

導入編 DPM をインストールするまでの各種設定について

基本操作編 DPM の基本的な使用方法について

応用編 DPM の各種機能の応用操作方法について

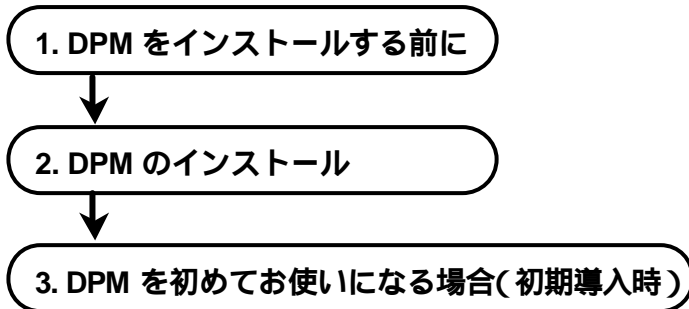
注意

本書では、特に断りが無い場合、以下の意味で記載しています。

- DPM をインストールしたマシンを「**管理サーバ**」と呼びます。
- 「**管理サーバ**」から遠隔操作を行われるマシンを「**コンピュータ**」と呼びます。
- 「**コンピュータ**」の内、Express5800/BladeServer,Express5800/Na の CPU ブレードを「**CPU ブレード**」と呼びます。

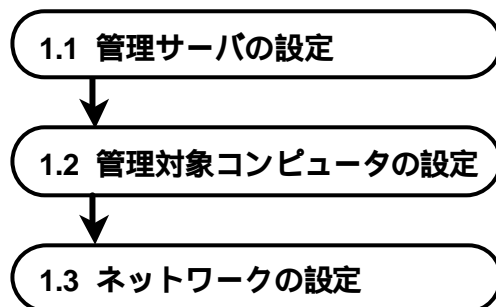
導入編

本章では、DPM の導入までを以下の流れに沿って説明します。



1. DPM をインストールする前に

DPM をインストールする前に必要な設定について以下の流れに沿って説明します。セットアップを始める前によくお読みください。



1.1 管理サーバの設定について

管理サーバがDPMを使用するために必要な以下のHW・SW環境を満たしているか確認してください。

HW 環境

CPU	Intel Pentium プロセッサ (600MHz) 以上
メモリ容量	128MB 以上
ディスク容量	75MB 以上 1
その他	NIC (Network Interface Card)・マウス・キーボード・1024×768 以上の解像度を持つディスプレイ必須

1 DPM の実行に最低限必要な量です。DPM で使用するインストール用 OS ファイル、サービスパック / HotFix イメージ等を格納するために別途容量が必要になります。

重要

ICMB(Intelligent Chassis Management Bus) を使用したHW管理を行う場合は、IPMI v1.5 以降をサポートしているExpress5800シリーズ装置をお使いください。対応機種についてはEXPRESSBUILDER CD - ROMに収納されている「MWAファーストステップガイド」の巻末附録「IPMI 1.5/1.0 対応装置のモデル名」に記載されています。

また、NECイントラネットに接続可能であれば以下のURLからダウンロードすることができます。

<http://soreike.wsd.mt.nec.co.jp/>

100シリーズ ガイド（ユーザズガイドなど） MWA（Management Workstation Application） ダウンロード 最新マニュアル

SW 環境

オペレーティングシステム	Windows 2000 Advanced Server、Server、Professional Windows Server 2003 Enterprise Edition、Standard Edition Windows XP Professional 2
--------------	--

2 Windows XP Professional を管理サーバとして使用される場合は、デスクトップの表示テーマを Windows クラシックに設定して使用してください。

管理サーバのネットワークプロトコルには TCP/IP を使用してください。

管理サーバの OS のネットワーク接続の IP アドレスの取得方法は、DHCP による自動取得ではなく固定 IP アドレスに設定してください。

ICMB を使用した HW 管理を行う場合は、DPM をインストールする前に ESMPRO/ServerAgent をインストールしてください。詳しくは「5. ICMB 接続について」を参照してください。

1.2 DPM で管理対象となるコンピュータの設定

管理対象となるコンピュータが以下の HW 環境を満たしているかどうか確認してください。

HW 環境

LAN	Wake On LAN・PXE2.0 対応の NIC
-----	----------------------------

リモートインストールサポート オペレーティングシステム	Windows 2000 Advanced Server、Server、Professional Windows Server 2003 Enterprise Edition、Standard Edition Windows XP Professional RedHat Linux 7.2、7.3、8.0、RedHat Enterprise Linux AS
--------------------------------	---

ヒント

DPMのサポート対象装置の一覧は以下のURLを参照してください。

(<http://www.ace.comp.nec.co.jp/dpm/list.html>)

上記のURLの装置以外では管理不可という訳ではありません。上記のURLに記載されているサポート対象とは、装置とハードディスクコントローラの組み合わせのことです。

管理対象となるコンピュータの BIOS に以下の設定を行ってください。

- PXE ブートするために、起動の順位の設定項目からネットワークの起動を先頭にしてください。
- Wake On LAN を行う設定にしてください。

重要

BIOS の設定方法はご使用の BIOS によって異なります。詳しくは販売店までお問い合わせください。BIOS の設定を変更する場合は十分注意して行ってください。

管理対象となるコンピュータの OS のネットワーク接続の IP アドレス取得方法は、DHCP による自動取得、固定 IP アドレスのどちらの設定でも結構です。

1.3 ネットワークの設定

DPM で管理するネットワークが以下の HW・SW 環境を満たしていることを確認してください。満たしていない場合は設定を変更してください。

HW 環境

LAN 構成	サーバとクライアント間は 100Mbps 以上の LAN で接続されていること
--------	---

SW 環境

DHCP サーバ	DPM を用いてコンピュータを管理するためには、DHCP サーバが必須になります
NFS サーバ	DPM を用いて RedHat Linux のリモートインストールを行うには NFS サーバが必要になります。RedHat Linux のインストールを行わない場合は必要ありません。

重要

DHCP サーバは、管理サーバ上に構築したものを使用することも、別のコンピュータに構築したものを使用することもできますが、管理サーバ上に構築したものを 사용하는場合は、その DHCP サーバは同一ネットワーク内で唯一の DHCP サーバでなければなりません。別のコンピュータ上に構築した DHCP サーバを使用する場合は、同一ネットワーク内に DHCP サーバが何台構築されていても結構です。

ヒント

DHCP サーバは DPM をインストールする前に設定することをお勧めします。DPM のインストール後に DHCP サーバを設定する場合は、「3.3 DHCP サーバの設定」をご覧ください。

DHCP サーバの設定方法

Windows 2000 Server 上での DHCP サービスの設定方法について説明します。

< DHCP (動的ホスト構成プロトコル) のインストール手順 >

DHCP サービスがインストールされていない場合は、以下の手順で、DHCP サービスをインストールしてください。

- (1) [スタート] メニュー [設定] [コントロールパネル] [アプリケーションの追加と削除] を選択する。
- (2) [Windows コンポーネントの追加と削除] をクリックし、「Windows コンポーネントウィザード」を起動する。
- (3) [ネットワークサービス] をクリックし、[詳細] をクリックする。
- (4) 「動的ホスト構成プロトコル (DHCP)」にチェックを入れ、[OK] をクリックする。
- (5) [Windows コンポーネントウィザード] に戻るため、[次へ] をクリックする。

インストールが開始されます。

- (6) インストール終了後、[完了] をクリックする。

以上で、DHCP サービスのインストールは完了です。

< DHCP の設定手順 >

- (1) [スタート] メニュー [プログラム] [管理ツール] [DHCP] を開く。
- (2) コンソールツリーで DHCP を右クリックして、「サーバの追加」をクリックする。
- (3) 「サーバの追加」が開くので、DHCP サーバにしたいサーバのコンピュータ名を入力するか [参照] から選択し [OK] をクリックする。
- (4) コンソールツリーに追加したサーバが表示されるので、追加したサーバを右クリックして「新しいスコープ」をクリックする。
- (5) 「新しいスコープ」ウィザードが開くので、[次へ] をクリックする。
- (6) 「スコープ名」が表示されるので、名前と説明を入力し [次へ] をクリックする。
- (7) 「IP アドレスの範囲」が表示されるので、開始 IP アドレスと終了 IP アドレスを設定し [次へ] をクリックする。

ヒント

サブネットマスクは、ネットワーク/サブネット ID とホスト ID の数を変更したい場合に設定してください。

- (8) 「除外の追加」が表示されるので、除外したい IP アドレスの範囲を入力して [次へ] をクリックする。

- (9) 「リース期間」が表示されるので、IP アドレスをリースしたい期間を設定して [次へ] をクリックする。
- (10) 「DHCP オプションの構成」が表示されるので、このスコープの DHCP オプションを今すぐ構成する場合は、「今すぐオプションを構成する」のラジオボタンにチェックを入れて [次へ] をクリックしオプションを構成する。後で構成する場合は、「後でオプションを構成する」のラジオボタンにチェックを入れて [次へ] をクリックする。

以上で DHCP の設定は完了です。

< DHCP サーバ構築時のご注意 >

Windows 2000 Server 標準添付の DHCP サービス以外を使用して DHCP サーバを構築する場合は、次の点に注意してください。

● 固定アドレスの使用

例えば Linux を使って DHCP サーバを構築する場合、dhcpd.conf に固定アドレスの指定が必要になる場合があります。

固定アドレスとは、管理対象となるコンピュータの MAC アドレスと、リース予定の IP アドレスの組をあらかじめ DHCP サーバに登録しておくことにより、コンピュータからのアドレス要求に対して DHCP サーバが固定の IP アドレスをリースする仕組みのことです。

固定アドレスの記述がない場合、DHCP サーバからの応答遅延が発生する場合があります。その場合 PXE 起動（ネットワーク起動）が失敗し、その影響で DPM が正常に動作できません。Linux 以外の UNIX 系 OS についても、同様に固定アドレスが必要になる場合があります。

以下は、MAC アドレス（12:34:56:78:9A:BC）のホストに固定アドレスを指定した場合の /etc/dhcpd.conf の例です。

```
subnet 192.168.0.0 netmask 255.255.255.0 {
    ...
    ...
    host computer-name {
        hardware ethernet 12:34:56:78:9A:BC;
        fixed-address 192.168.0.32;
    }
}
```

ルータを越えた複数のサブネットのコンピュータを DPM で管理するには、あらかじめルータに以下の設定を行っておく必要があります。

- Wake On LAN をするために、ダイレクトブロードキャストをルーティングする。
- マルチキャストプロトコルの設定を行う。
- DHCP パケットのリレーを行う。
- DPM が通信に使用している以下のポートをルーティング、フォワーディングする。

ヒント

ルータ、HUB 等のネットワーク機器の設定は DPM のインストール後でも行うことができます。

項目	プロトコル	ポート番号
電源 ON	UDP	5561
シャットダウン	TCP	56010
生存確認 (電源 ON/OFF の状態確認)	ICMP	
ネットワークブート	UDP	67,68,69,4011
OS クリアインストール	TCP	137,138,139,445, 56022,56023
クライアントの OS /HotFix 情報取得	TCP	56011

ネットワークブートの項目に記載されているプロトコルとポート番号も追加が必要となります。

注意

- 生存確認 (電源 ON/OFF 状態の確認) は DPM で登録した「コンピュータ名」で通信を行います。
- 「コンピュータ名」で通信ができるようにネットワーク環境を設定してください。

ヒント

- ルータ、HUB等のネットワーク機器の設定については、購入元にお問い合わせください。
- ICMB 接続時の「強制シャットダウン」、生存確認 (電源 ON/OFF 状態の確認) は LAN を使用しないため、ポート番号の設定は不要です。

以下で DPM が通信で使用するプロトコル、ポート番号の詳細を示します。

以降の表では上部から下部へ通信が流れる様子を記述しています。

■ 電源 ON

	Port 番号	プロトコル	宛先指定	データ向き	Port 番号	
コンピュータ	1	UDP	Direct Broadcast 2		5561	管理サーバ

- 1 ポートは自動的に割り当てられる。
- 2 管理サーバと同じセグメントのコンピュータに対しては 255.255.255.255 宛てとなる。
管理サーバと別セグメントの場合はダイレクトブローキャストとなる。
例) 192.168.0.0 (MASK=255.255.255.0) セグメントの場合 192.168.0.255 宛になる

■ シャットダウン

	Port 番号	プロトコル	宛先指定	データ向き	Port 番号	
コンピュータ	56010	TCP	Unicast		1	管理サーバ
	56010	TCP	Unicast		1	

- 1 ポートは自動的に割り当てられる。

■ 生存確認（電源 ON/OFF 状態の確認）

	Port 番号	プロトコル	宛先指定	データ向き	Port 番号	
コンピュータ	8 1	ICMP Echo request	Unicast		- 1	管理サーバ
	- 1	ICMP Echo Reply	Unicast		0 1	

- 1 ICMP ではポート番号を指定した通信は行わないが、ICMP の Type フィールド値を使ってルーティングする。

■ ネットワークブート

	Port 番号	プロトコル	宛先指定	データ向き	Port 番号	
コンピュータ	68	DHCP	Broadcast 1		67	DHCP サーバ
	68	DHCP	Broadcast 1		67	
コンピュータ	68	DHCP	Broadcast 1 2		67	管理サーバ
	68	DHCP	Broadcast 1		67	
	68	UDP	Unicast		4011	
	68	DHCP	Unicast		67	
	4011	UDP	Unicast		4011	
	4011	DHCP	Unicast		67	
	3	UDP (TFTP)	Unicast		69	
	3	UDP (TFTP)	Unicast		69	
	56022	TCP	Unicast		56022	
56022	TCP	Unicast		56022		

- 1 DHCP リレーによりリレーされたパケットの宛先は Unicast になる場合がある。
 2 DHCP サーバと管理サーバが別装置の場合のみ。
 3 装置添付の NIC ROM に依存する。

■ OS クリアインストール（ネットワークブート に以下を追加）

	Port 番号	プロトコル	宛先指定	データ向き	Port 番号	
コンピュータ	1	TCP (Netbios)	Unicast		137 138 139	管理サーバ
	1	TCP (Netbios)	Unicast		137 138 139	
	1	TCP (SMB)	Unicast		445	
	1	TCP (SMB)	Unicast		445	

1 ポートは自動的に割り当てられる。

■ クライアント情報の OS/Hotfix 情報取得

	Port 番号	プロトコル	宛先指定	データ向き	Port 番号	
コンピュータ	1	TCP	Unicast		56011	管理サーバ
	1	TCP	Unicast		56011	

1 ポートは自動的に割り当てられる。

Windows 2000 Server を用いてソフトウェアルーティングをされている場合は、以下の手順でマルチキャストプロトコルの設定と DHCP リレーエージェントの設定ができます。

< マルチキャストプロトコルの設定手順 >

DHCP サービスをインストールする必要があります。DHCP サービスのインストール方法については DHCP（動的ホスト構成プロトコル）のインストール手順を参照してください。

- (1) [スタート] メニュー [プログラム] [管理ツール] [DHCP] を開く。
- (2) コンソールツリーでルータを右クリックし、「新しいマルチキャストスコープ」をクリックする。
- (3) 「新しいマルチキャストスコープ」ウィザードが開くので、[次へ] をクリックする。
- (4) 「マルチキャストスコープ名」が表示されるので、名前と説明を入力し [次へ] をクリックする。
- (5) 「IP アドレスの範囲」が表示されるので、開始 IP アドレスと終了 IP アドレスを設定し [次へ] をクリックする。
- (6) 「除外の追加」が表示されるので、何も設定せず [次へ] をクリックする。
- (7) 「リースの期間」が表示されるので、そのまま [次へ] をクリックする。
- (8) 「利用可能なマルチキャストスコープ」が表示されるので、[次へ] をクリックする。

- (9) 「新マルチキャストスコープウィザードの完了」が表示されるので、[完了]をクリックする。
- (10) [スタート]メニュー [プログラム] [管理ツール] [ルーティングとリモートアクセス]を開く。
- (11) コンソールツリーで[全般]を右クリックし、[新しいルーティングプロトコル]をクリックする。
- (12) 「新しいルーティング プロトコル」ダイアログ ボックスで、[IGMP Version 2、ルーターとプロキシ]を選択し、[OK]をクリックする。
- (13) コンソールツリーで、[IGMP]をクリックする。
- (14) [IGMP]を右クリックし、[新しいインターフェイス]をクリックする。
- (15) [インターフェイス]で有効にするインターフェイスを選択し、[OK]をクリックする。
- (16) 「IGMPのプロパティ - 選択したインターフェイスのプロパティ」が表示されるので、[IGMPを有効にする]のチェックボックスにチェックが入っていることを確認し、[モード]がIGMP ルータになっていることを確認して[OK]をクリックする。

以上で、マルチキャストプロトコルの設定は完了です。

< DHCP リレーエージェントの設定方法 >

- (1) [スタート]メニュー [プログラム] [管理ツール] [ルーティングとリモートアクセス]を開く。
- (2) コンソールツリーで IP ルーティングの下の[全般]を右クリックし、[新しいルーティングプロトコル]をクリックする。
- (3) 「新しいルーティング プロトコル」ダイアログ ボックスで、[DHCP リレーエージェント]を選択し、[OK]をクリックする。
- (4) コンソールツリーで [DHCP リレーエージェント]を右クリックし、[新しいインターフェイス]をクリックする。
- (5) 「DHCP リレーエージェントの新しいインターフェイス」ダイアログボックスで DHCP パケットをリレーしたいインターフェイスをクリックし、[OK]をクリックする。
- (6) 「DHCP リレーエージェントのプロパティ - 選択したインターフェイスのプロパティ」が表示されるので、[OK]をクリックする。

- (7) コンソールツリーの [DHCP リレーエージェント] を右クリックし、[プロパティ] をクリックする。
- (8) 「DHCPリレーエージェントのプロパティ」が表示されたら DHCPサーバの IP アドレスを入力して、[OK] をクリックする。

以上で、DHCP リレーエージェントの設定は完了です。

2. DPM のインストール

DPM をインストールするのに必要な設定について説明します。

2.1 DPM のインストール

DPM をインストールするには、以下の点にご注意ください。

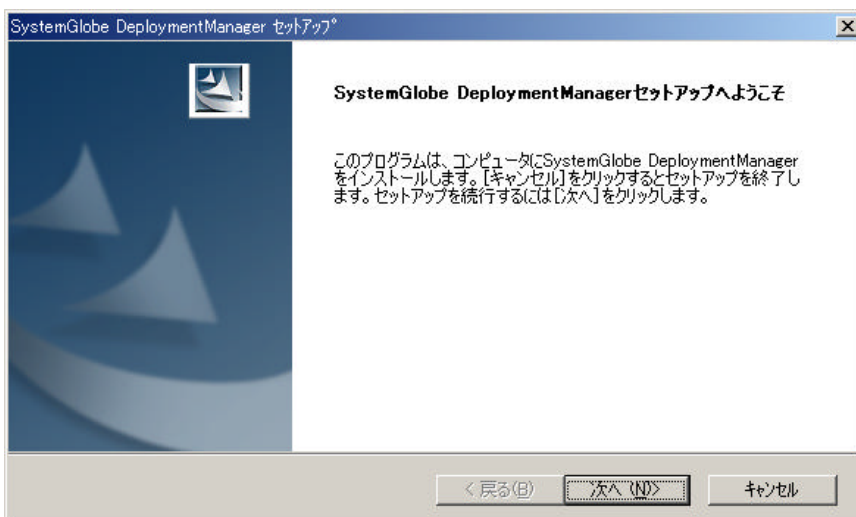
- (1) インストール及びこれ以降の作業は、Administrator 権限を持ったユーザで行ってください。
- (2) インストールに必要なディスク容量を確認してください。DPM をインストールするハードディスクには、約 45MB の容量が必要です。
- (3) DPM で管理する予定のネットワーク内に、DPM がインストールされているコンピュータが存在しないことを確認してください。また、ルータを越えたネットワークにある DPM から管理されていないことも確認してください。

重要

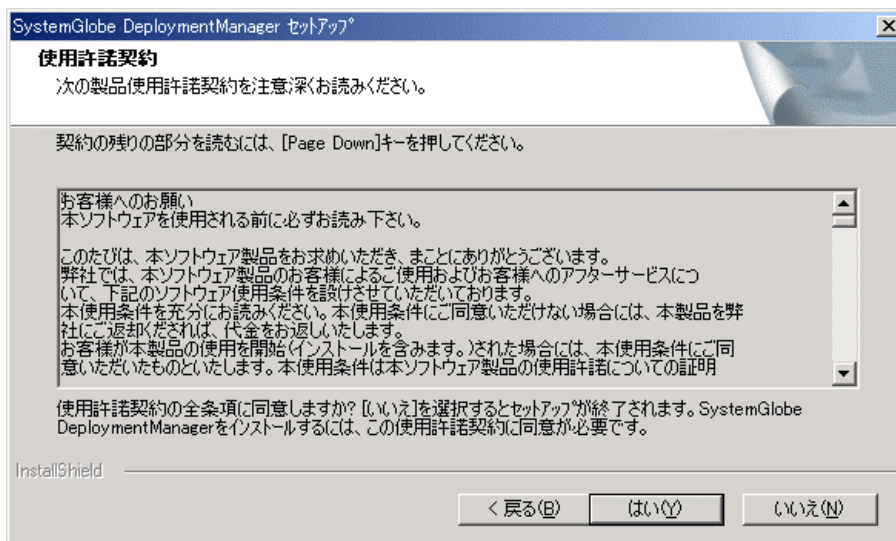
- DPM のインストール前に、あらかじめ DHCP サーバの設定を行うことを推奨します。
- 同一ネットワーク上の複数のコンピュータに DPM をインストールしないでください。Ver が異なるものや、製品版であっても同一ネットワーク内に同居していると誤作動の原因となります。

DPM のインストール手順について説明します。

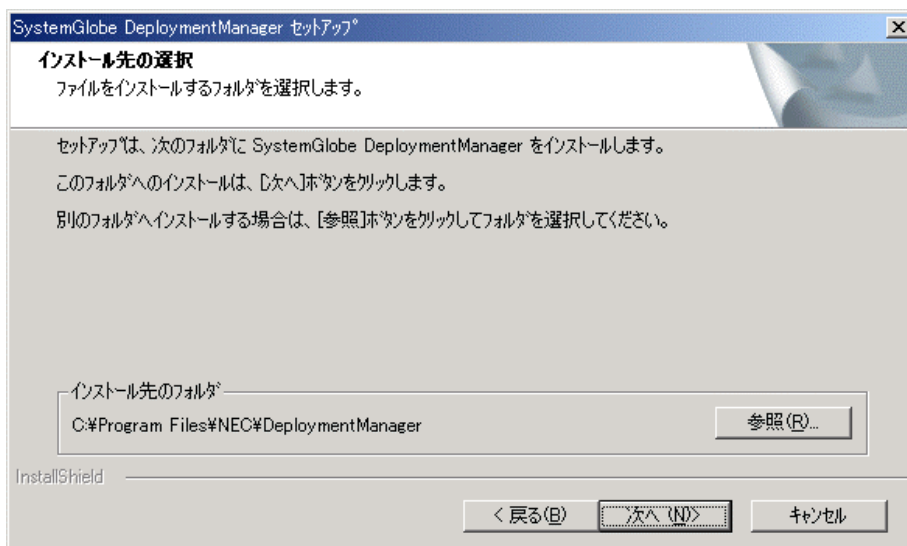
- (1) DPM のインストール方法は以下の 2 通りの方法があります。
 - a. EXPRESSBUILDER CD-ROM の[MC メニュー] [ソフトウェアのセットアップ] [SystemGlobe DeploymentManger Lite のセットアップ]を選択。
 - b. EXPRESSBUILDER CD-ROM の¥DPML¥SETUP¥SETUP.EXE を実行。
- (2) [セットアップへようこそ] ウィザードが開くので、[次へ] をクリックする。



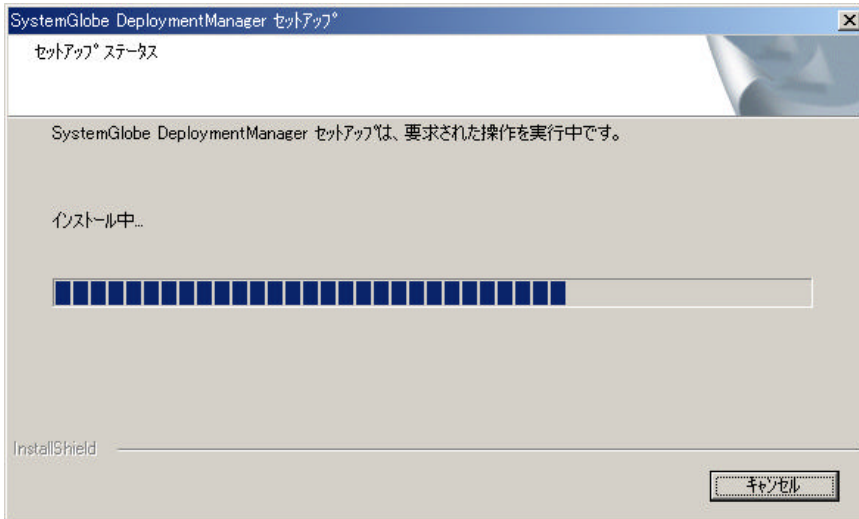
- (3) 「使用許諾契約」が表示されるので、内容をよく読み [はい] をクリックする。



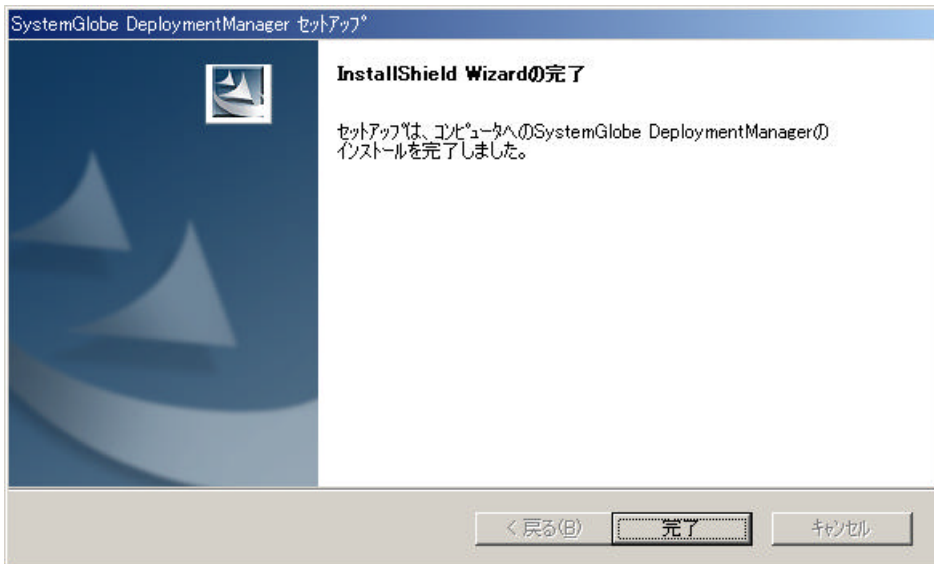
- (4) [インストール先の選択] が表示されるので、インストール先のフォルダを指定して [次へ] をクリックする。



- (5) インストールが開始されます。インストールが完了するまでしばらくお待ちください。



- (6) インストールが完了したら [完了] をクリックしてください。インストール完了後、[スタート]メニューに「SystemGlobe DeploymentManager」が登録されます。



3. DPM を初めてお使いになる場合（初期導入時）

DPM を初めてお使いになる場合の設定について以下の流れに沿って説明します。作業を行う前によくお読みください。



3.1 DPM の起動

以下の手順で、DPM を起動します。

- (1) [スタート] メニューから、[プログラム] [SystemGlobe DeploymentManager] [SystemGlobe DeploymentManager Lite] を選択する。
[パスワード設定] 画面が表示されます。



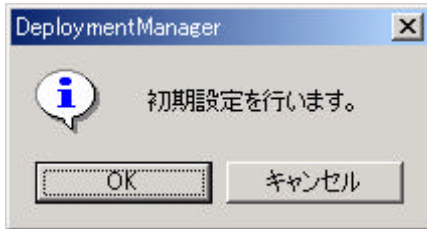
ヒント

パスワードは半角英数記号 1 文字から 15 文字まで入力できます。

重要

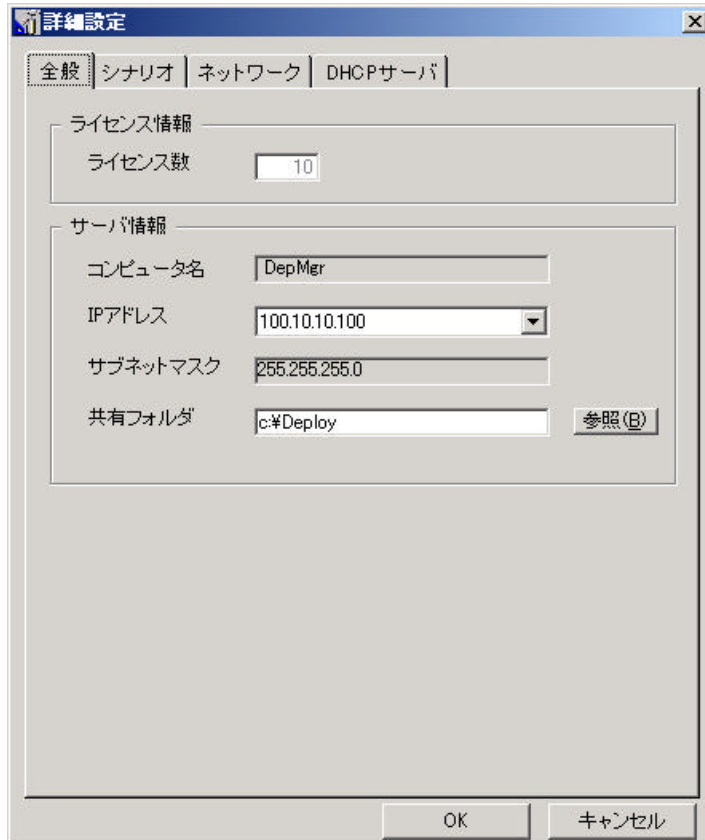
- 管理者パスワードとは「ガードパラメータ」の設定変更時や、「ガードパラメータ」で設定された処理実行時に入力するパスワードのことです。
- 管理者パスワードは絶対に忘れないようにしてください。
- 管理者パスワードを忘れた場合、DPM の再インストールが必要になります。

- (2) 「パスワード入力」と「確認パスワード入力」に同じ管理者パスワードを入力し、[OK] をクリックする。初期確認のメッセージが表示されます。



(3) [OK] をクリックする。

[詳細設定] 画面が表示されます。 [全般] タブが選択されています。



- 管理サーバが複数 IP アドレスを持っている場合、 [サーバ情報] ボックスの IP アドレスから管理するコンピュータが存在するネットワークの IP アドレスを選択してください。
- 共有フォルダを変更したい場合は、 [サーバ情報] ボックスの共有フォルダから変更したいフォルダを参照してください。

ヒント

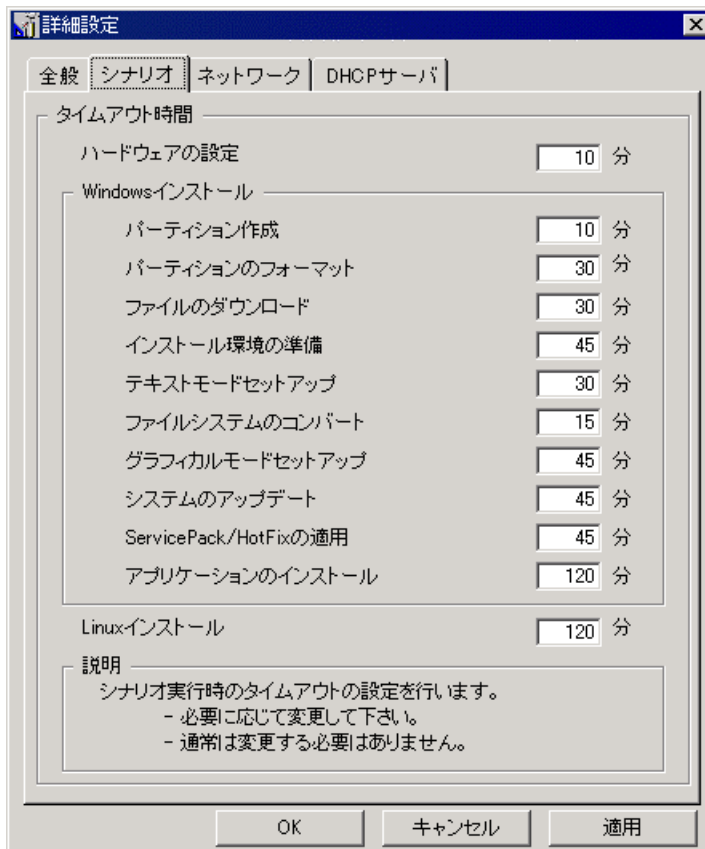
[サーバ情報] ボックスの共有フォルダは、DPM でリモートインストールを行うオペレーティングシステム、アプリケーション、サービスパック等を格納するフォルダ名を指定します。十分な空き容量を確保してください。初期値は「c:\Deploy」です。

注意

- Windows のシステムフォルダや他のアプリケーションプログラムで使用しているフォルダは入力しないでください。
- 共有フォルダの変更は、必ずここから行ってください。また、共有フォルダの内容をエクスプローラ等から直接、編集・削除しないで下さい。

- DPM がインストールされている管理サーバ自身の IP アドレスを変更する場合は DPM を終了させた後行ってください。IP アドレス変更後、全コンピュータに対して、管理サーバからシャットダウンを行ってください。

(4) [シナリオ] タブを選択する。

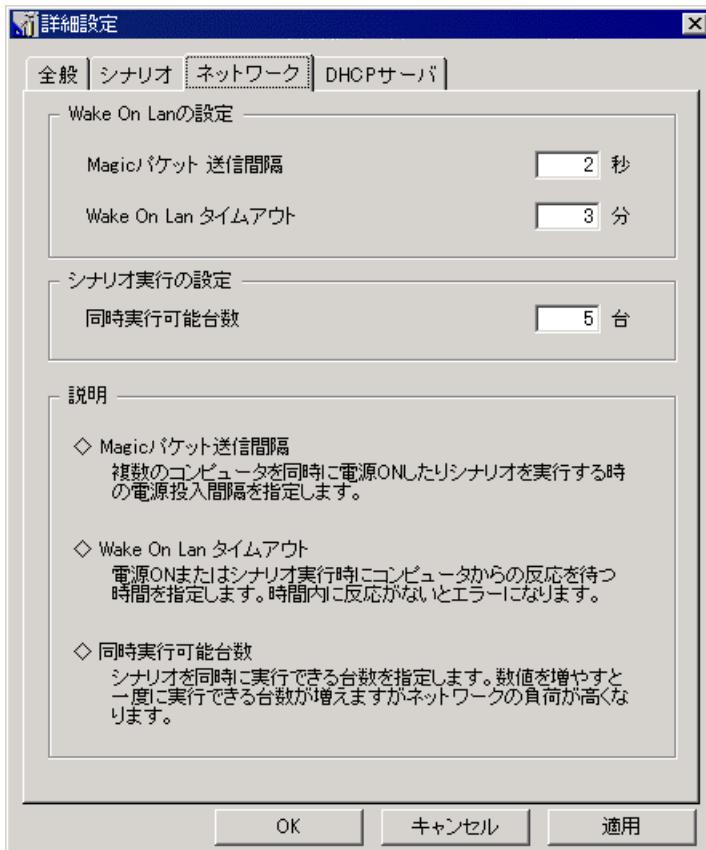


- シナリオのタイムアウト時間の設定を行います。必要に応じて時間を変更してください。通常は変更する必要はありません。

ヒント

- シナリオタイムアウト時間とは、シナリオ実行時のタイムアウトの時間のことです。各項目で設定した時間を過ぎてもシナリオが終了しない場合は、シナリオ実行エラーとなります。
- AoutRaid の機能を使用する場合は、ハードウェアの設定の時間を大きくすることをお勧めします。

(5) [ネットワーク] タブを選択する。

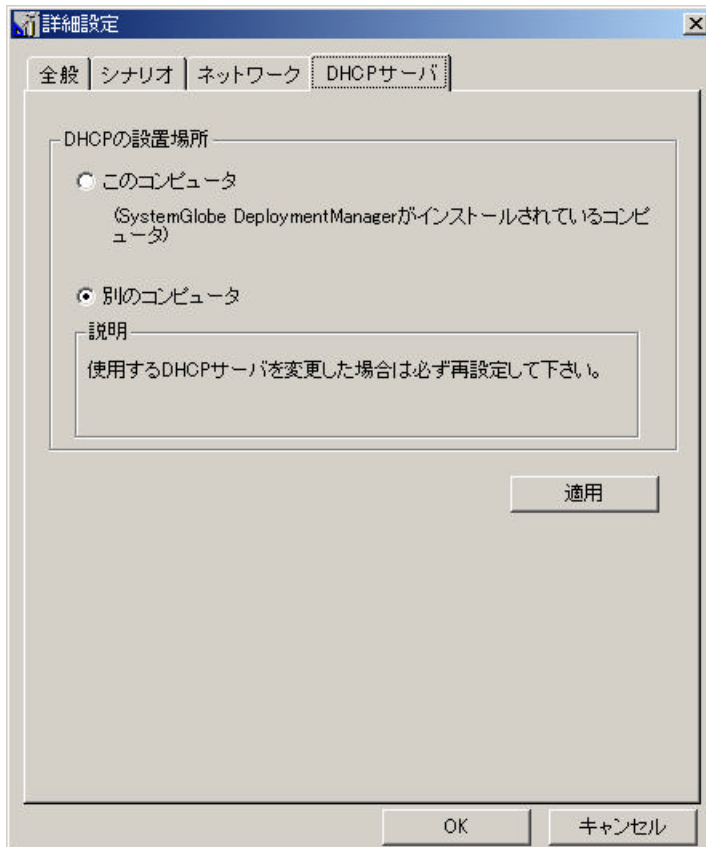


- Wake On LAN とシナリオ実行台数の設定ができます。必要に応じて変更してください。

ヒント

- Magic パケット送信間隔とは複数のコンピュータを同時に電源 ON したりシナリオ実行したりするときの電源投入間隔のことです。デフォルトは 2 秒に設定されています。
- Wake On LAN タイムアウトとは電源 ON またはシナリオ実行時にコンピュータからの反応を待つ時間のこと。時間内に反応が無い場合は Wake On LAN エラーになります。デフォルトは 3 分に設定されています。電源 ON はするが Wake On LAN エラーが発生するという場合は、この数値を大きくしてみてください。
- 同時実行可能台数とはシナリオを同時に実行できる台数を指定します。数値を増やすと一度に実行できる台数が増えますがネットワークの負荷が高くなります。デフォルトは 5 台に設定されています。

(6) [DHCP サーバ] タブ 選択する。



- DHCP サーバの設置場所を確認してください。管理サーバ上にインストールされた DHCP サービスを使用する場合には、特に変更することはありません。別のコンピュータ上の DHCP サービスを使用する場合は、[別のコンピュータ]を選択してください。

重要

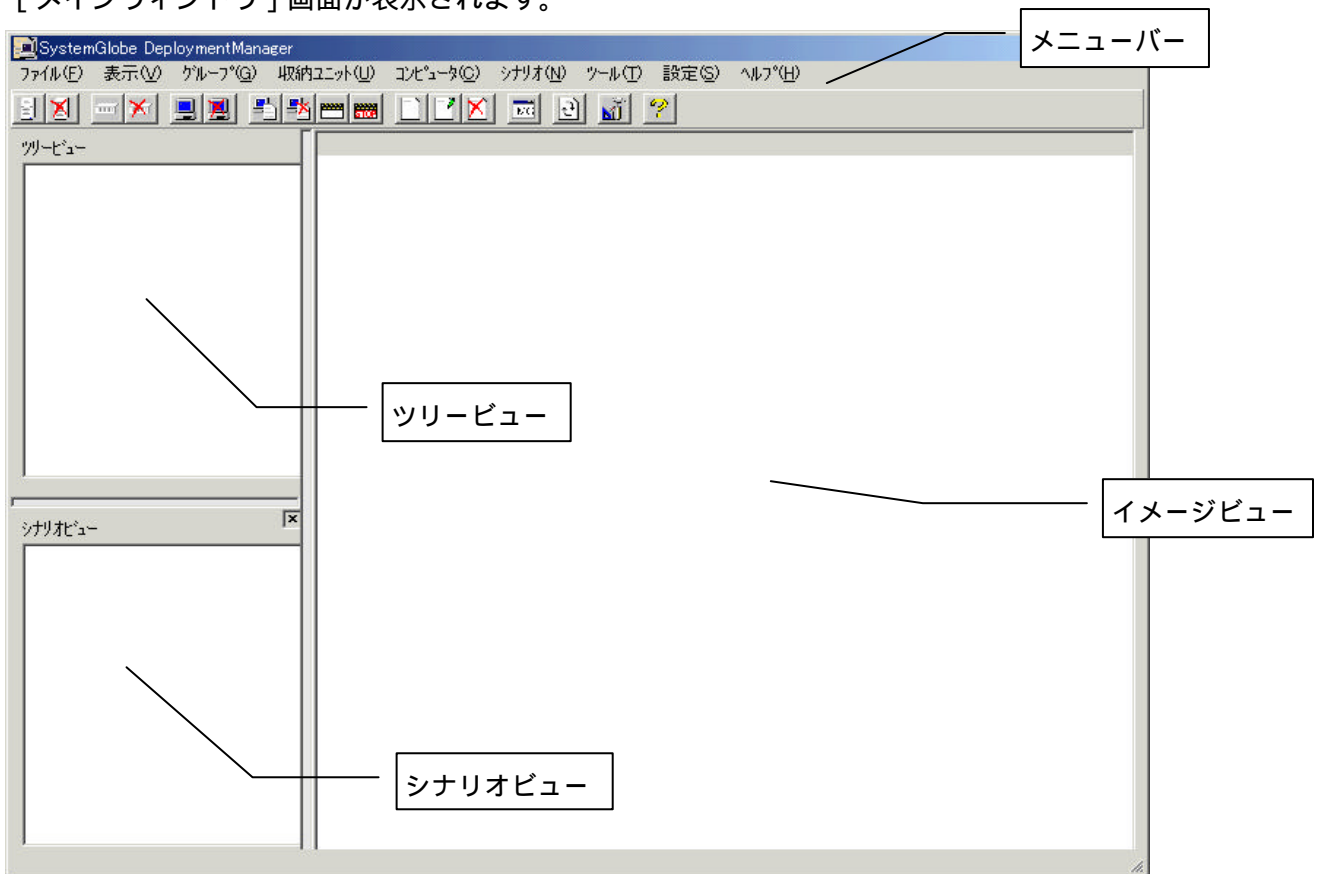
管理サーバ上に構築した DHCP サービスを使用する場合は、同一ネットワークに他の DHCP サーバを設置しないで下さい。別のコンピュータ上に構築した DHCP サービスを使用する場合は、同一ネットワーク内に DHCP サーバが何台存在していても結構です。

ヒント

[DHCP サーバ] タブ内の [適用] は、内容に変更がない場合でも現在の設定内容に従って適用処理が行われます。

(7) [OK] をクリックする。

[メインウィンドウ] 画面が表示されます。



各項目の説明

- メニューバー
シナリオビューの表示、非表示の選択や、イメージビルダー画面の表示等を行います。
- ツリービュー
追加したグループや収納ユニットとコンピュータが表示されます。
- シナリオビュー
作成したシナリオが表示されます。
- イメージビュー
ツリービューで選択されているグループに属するコンピュータが表示されます。

3.2 DHCP サーバの設定

DHCP サーバの設定は以下のようなときに行う必要があります。

- DHCP サーバの場所が変わったとき
- DPM のインストール後に DHCP サービスをインストールしたとき

設定方法については以下ようになります。

注意

以下の操作は、DHCP サービスのインストール後に行います。DHCP サービスのインストール前に行った場合は、インストール後に、再度この操作が必要です。

- (1) [設定]メニューから[詳細設定]を選択し、[DHCP サーバ]タブを選択する。
- (2) DHCP サービスがインストールされた場所にあわせて「このコンピュータ」か「別のコンピュータ」にチェックを入れる。
- (3) [適用]をクリックする。
ポップアップが表示されます。



変更内容はコンピュータの再起動後に反映されます。再起動なしで反映させる場合は、ポップアップで表示されているサービスを、[スタート]メニュー - [管理ツール] - [サービス]を使用して再起動してください。（複数表示されている場合は、上から順番に再起動します。）

以上で設定は完了です。

3.3 ガードパラメータの設定

ガードパラメータの設定を行います。ガードパラメータとは、それぞれの処理実行時に、管理者パスワードを入力するか、警告メッセージを表示して、操作ミスを防ぐためのものです。

- (1) [設定]メニューから、[ガードパラメータ設定]を選択する。
[設定の変更]画面が表示されます。



(2) それぞれの処理に対して「パスワード」、「警告」、「なし」のいずれかを選択する。

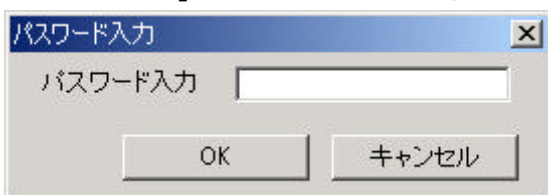
「パスワード」・・・処理実行時に、管理者パスワードを入力する画面を表示し、正しい管理者パスワードを入力しないと処理を実行できません。

「警告」・・・処理実行時に、確認メッセージを表示して注意します。誤って実行しないように確認メッセージを表示したい場合に設定してください。

「なし」・・・処理実行時に、何も表示しません。

(3) [OK] をクリックする。

[パスワード入力] 画面が表示されます。

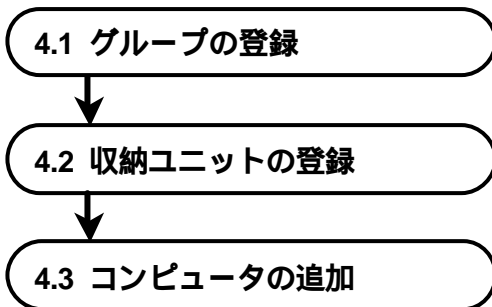


(4) 管理者パスワードを入力して、[OK] をクリックする。

ここまでが、初期設定の流れとなります。実際の使用方法については、「シナリオ実行までの流れ」を参照してください。

4. DPM にコンピュータを登録するまで

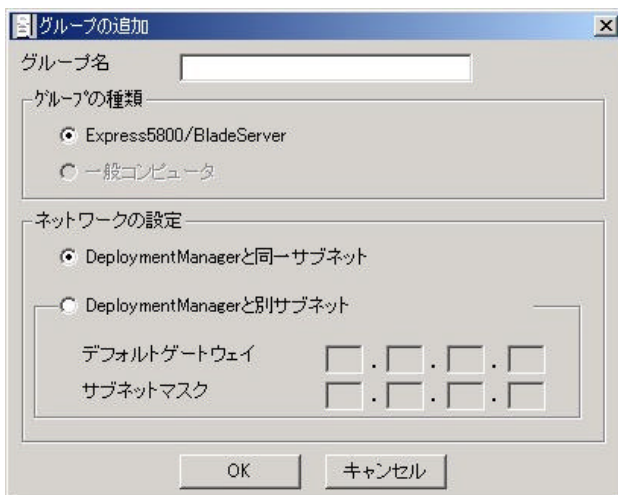
DPM にコンピュータを登録するまでを以下の流れに沿って説明します。



4.1 グループの登録

コンピュータが属するグループの登録を行います。

(1) ツリービュー上で右クリックし、[グループの追加]を選択する。



[グループの追加]画面が表示されるので、グループの種類には、CPU ブレードを登録するグループ「Express5800/BladeServer」を選択して、グループ名を入力してください。

ヒント

- グループ名は 64 バイト以内の半角英数字と「-」ハイフンと「_」アンダーバーと「.」ピリオドが入力できます。
- グループは最大で 16 グループ登録できます。
- コンピュータは 1 グループにつき、最大で 96 台(1 グループ最大 16 収納ユニットで、1 収納ユニットあたり CPU ブレードは最大 6 台登録可能)登録可能です。
- [グループ]メニューの[グループの追加]を選択しても [グループの追加]画面を表示できます。
- ネットワークの設定の「DeploymentManager と別サブネット」は、管理サーバがルータを介して別のネットワークサブネットへ属する場合に指定してください。

- (2) [OK] をクリックする。

ツリービューに登録したグループ名が表示されます。

4.2 収納ユニットの登録

CPU ブレードが属する収納ユニットの登録を行います。ICMB 接続によるコンピュータの登録を行う場合は、「5. ICMB 接続について」へお進みください。

- (1) ツリービュー上で収納ユニットを追加したい「グループ」を右クリックし、「収納ユニットの追加」を選択する。

[ブレード収納ユニット ID 入力] 画面が表示されます。



- (2) 収納ユニット ID を選択して、[OK] をクリックする。

ツリービューに登録した収納ユニット名が表示されます。

ヒント

使用するブレード収納ユニットの ID を選択してください。数値は 1～16 までです。

注意

Express5800/BladeServer の場合、収納ユニットの ID がロータリースイッチに " 0～F " と書かれている場合、DPM では " 1～16 " に対応します。

4.3 コンピュータの登録

コンピュータを自動で登録する場合

コンピュータを自動で登録する方法について説明します。手動で登録する場合は「コンピュータを手動で登録する場合」へ、ICMB 接続を用いて登録を行う場合は「5. ICMB 接続について」へ進んでください。

- (1) コンピュータの電源を ON にする。

ツリービュー上に「新規コンピュータ」が追加されます。

ヒント

複数台のコンピュータを登録する場合は、一度に電源 ON せずに、一台ずつ電源 ON を行って登録することをお勧めします。

(2) 「新規コンピュータ」をダブルクリックする。

手動で電源 ON したコンピュータの「MAC アドレス」が表示されます。

(3) ツリービュー上に表示された「MAC アドレス」を右クリックし、「コンピュータの追加」を選択する。

[コンピュータの追加] 画面が表示されます。

ヒント

「MAC アドレス」をイメージビューにドラック & ドロップしても、「コンピュータの追加」を行うことができます。

(4) 必要な項目を入力し、[OK] をクリックする。

重要

すでに管理するコンピュータに Windows OS がインストールされている場合は、必ず登録するコンピュータ名は管理するコンピュータ名と同じ名前にしてください。

ヒント

- コンピュータ名は 63 バイト以内で入力できます。「.」ピリオドと「;」セミコロンは入力できません。
- スロット ID は CPU ブレードを登録するブレード格納ユニットの位置情報です。
- 「シナリオ」は未入力でもコンピュータの登録は可能です。
- ディスプレイが接続されている場合は、管理するコンピュータ側の電源を ON にすると、ディスプレイに以下のメッセージが表示され、電源を ON にしたコンピュータが管理サーバに登録されたことがわかります。

This Computer has been just registered by the management server.
Press F8 to view menu. (30)

30 秒すると自動的に電源 OFF されますが、すぐに電源を OFF にしたい場合は、<F8> キーを押し、表示されたメニューから「Power Down」を選択してください。そのまま、コンピュータを起動したい場合は、<F8> キーを押し、表示されたメニューから「Local Boot」を選択してください。

注意

- SystemGlobe DeploymentManager Ver2.3 Lite 版ではシナリオ実行時間、クライアントからのシナリオ実行許可、電源管理スケジュールを指定することはできません。
- Express5800/420Ma,Express5800/Na の場合、スロット幅を 1 に変更してください。

コンピュータを手動で登録する場合

- (1) ツリービュー上で CPU ブレードを登録したい「収納ユニット」を右クリックし、「コンピュータの追加」を選択する。

「コンピュータの追加」画面が表示されます。

ヒント

[コンピュータ]メニューの[コンピュータ追加]を選択しても[コンピュータの追加]画面を表示できます。

- (2) 必要な項目を入力し、[OK]をクリックする。

重要

- すでに管理するコンピュータに Windows OS がインストールされている場合は、必ず登録するコンピュータ名は管理するコンピュータ名と同じ名前にしてください。
- MAC アドレスは「XX-XX-XX-XX-XX-XX」の形式で正しく入力してください。

ヒント

- コンピュータ名は 63 バイト以内で入力できます。「.」ピリオドと「;」セミコロンは入力できません。
- スロット ID は CPU ブレードを登録するブレード格納ユニットの位置情報です。
- 「シナリオ」は未入力でもコンピュータの登録は可能です。

注意

- SystemGlobe DeploymentManager Ver2.3 Lite 版ではシナリオ実行時間、クライアントからのシナリオ実行許可、電源管理スケジュールを指定することはできません。
- Express5800/420Ma,Express5800/Na の場合、スロット幅を 1 に変更してください。

5. ICMB 接続について

ICMB (Intelligent Chassis Management Bus) は、IPMI (Intelligent Platform Management Interface) で規定されるサーバ管理情報を取得するためのバスです。ICMB を使えば DPM で効率的に CPU ブレードを管理することが可能です。ICMB を使用することにより CPU ブレードに対し以下のことを行うことができます。

- 挿入スロットの位置情報の自動取得 (DPM へのコンピュータの自動登録)
- OS の起動に依らない電源 ON/OFF ステータス情報の取得
- 強制シャットダウン

ICMB を使用するためには以下の要件を満たしている必要があります。

- 管理サーバに IPMI v1.5 以上をサポートしている Express5800 シリーズの装置を使用すること
- 対象となる CPU ブレードに対応した ESMPRO/ServerAgent + Update がインストールされていること

重要

- Express5800/BladeServer, Express5800/NaをICMB接続する場合は、LAN1ポートを管理サーバに接続してください。
また、BIOS 初期値設定(ブート順位)が以下のような設定かご確認ください。
 - ・ CD
 - ・ リムーバブル
 - ・ NIC1 --- ネットワークブート有効
 - ・ HDD
 - ・ NIC2 --- ネットワークブート無効NIC2 の設定がネットワーク有効の場合、および NIC2 の設定が NIC1 より上位にありますと、DPM が正常に動作しない場合があります。上記以外の場合は設定変更をお願い致します。
- IPMI v1.5以上のサポート対応装置についてはEXPRESSBUILDER CD - ROMに収納されている「MWAファーストステップガイド」の巻末附録「IPMI 1.5/1.0 対応装置のモデル名」に記載されています。また、NECイントラネットに接続可能であれば以下のURLからダウンロードすることができます。
<http://soreike.wsd.mt.nec.co.jp/>
100シリーズ ガイド(ユーザズガイドなど) MWA(Management Workstation Application) ダウンロード 最新マニュアル

ESMPRO/ServerAgent のインストールは、以下の手順を管理サーバ上で行ってください。

- (1) DPM がインストール済で起動している場合は、DPM を終了させる。
- (2) 管理サーバに添付の EXPRESSBUILDER から ESMPRO/ServerAgent をインストールする。

- (3) 管理サーバの再起動を行う。
- (4) Express5800/BladeServer, Express5800/Na に添付の EXPRESSBUILDER CD - ROM の ¥DPML¥ESMSA_up¥SETUP.EXE を実行してアップデートを行う。

注意

- 管理する Express5800/BladeServer が Express5800/420Ma の場合、Express5800/420Ma に添付の EXPRESSBUILDER から ESMPRO/ServerAgent の Update を行う必要があります。
Express5800/Na 添付の EXPRESSBUILDERから Updateを行う場合は、Express5800/420Ma用のアップデートも実施されますので、本Updateは実行不要です。
- Express5800/Na の場合、Express5800/Na に添付の EXPRESSBUILDER から ESMPRO/ServerAgent の Update を行う必要があります。
- EXPRESSBUILDER のバージョンによっては、ESMPRO/ServerAgent 登録時に「ESMPRO/DeploymentManager」と表示される場合があります。その際は「SystemGlobe DeploymentManager」と読み替えてください。登録には影響ありません。

ESMPRO/ServerAgent をインストールすると「Express5800/BladeServer」グループの右クリックメニューの ICMB 接続が選択できるようになります。

ICMB 接続を用いたコンピュータの登録方法

ICMB 接続を用いたコンピュータの登録方法について説明します。

- (1) 管理サーバと CPU ブレードの筐体を ICMB ケーブルで接続します。(ICMB 接続口は CPU ブレードを格納する筐体の前面右側にあります。)
- (2) 「4.1 グループの登録」で作成した「Express5800/BladeServer」グループを右クリックして [ICMB 接続] を選択します。
- (3) ツリービュー上のグループアイコンが水色になり、接続されている CPU ブレードと CPU ブレードが収納されている収納ユニットが登録されます。

注意

[強制シャットダウン] の機能を使用して CPU ブレードの電源を OFF にすると次回 Wake ON LAN しない場合があります。ご注意ください。

ヒント

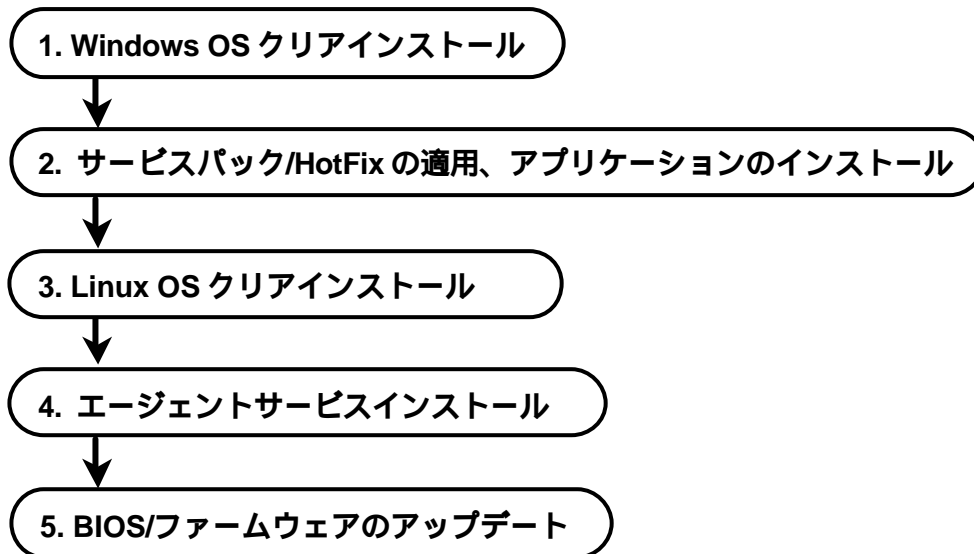
- ICMB 接続は 1 グループのみ行えます。
- ICMB 接続を解除する場合は、グループの右クリックメニューから [ICMB 解除] を選択してください。登録中のコンピュータは解除を行っても削除されません。
- ICMB 接続中はコンピュータの右クリックメニューに [強制シャットダウン] が追加されます。「強制シャットダウン」は CPU ブレードの状態をよく確かめてから行って

ください。

- ICMB 接続を行うと新規に登録されたコンピュータには任意の名前が登録されます。電源 ON 状態の Windows OS がインストールされた CPU ブレードに対しシナリオ実行、シャットダウンを行う場合はコンピュータ名を Windows OS 上のものと一致させてください。

基本操作編

この章では、DPM の各機能の基本的な使用方法について以下の流れで説明します。



1. Windows OS クリアインストール

DPM から Windows 系 OS をインストールする方法について説明します。Windows のインストールでは、コンピュータ毎の OS 設定（ホスト名等）は、あらかじめパラメータファイルを作成しておくことで自動セットアップが可能です。

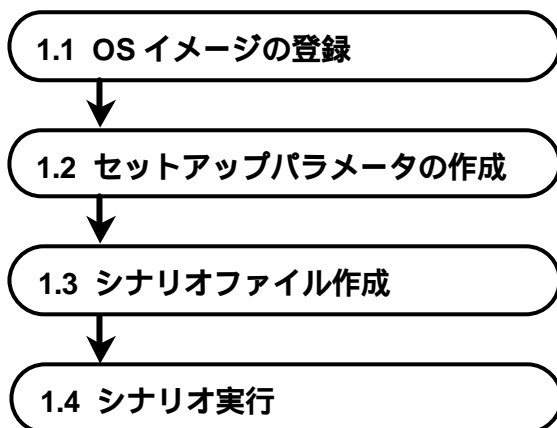
重要

OS クリアインストールがサポートする Windows OS は以下のとおりです。

- Windows 2000 Professional、Server、Advanced Server、
Windows XP Professional、
Windows Server 2003 Enterprise Edition、Standard Edition

上記以外の OS は DPM から OS クリアインストールすることはできません。ご注意ください。

シナリオ実行までの流れ



1.1 OS イメージの登録

ここでは、Windows OS のイメージを登録する方法について説明します。

- (1) インストールする OS の CD - ROM 媒体を管理サーバの CD ドライブにセットします。

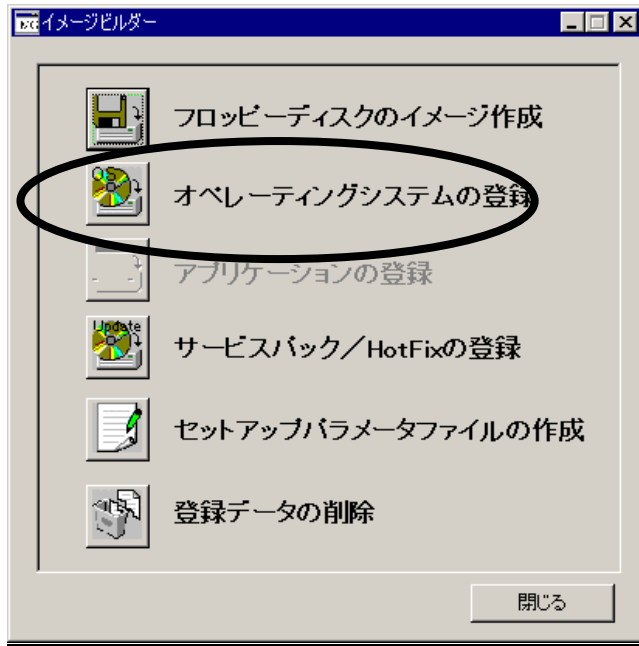
注意

マシンに添付されているバックアップ/リカバリ CD はご使用になれない場合があります。CD - ROM が i386 フォルダを含む形式であるものなら、インストール可能です。

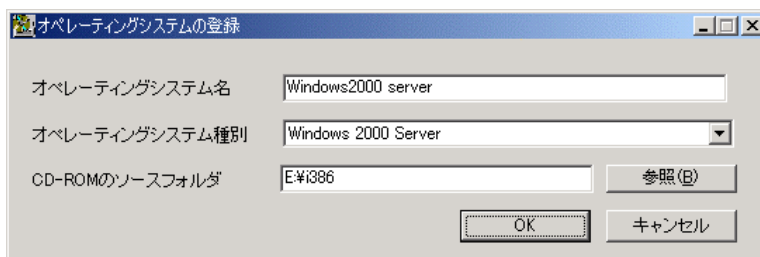
- (2) [ツール]メニューから [イメージビルダー] を選択し、イメージビルダーを起動させます。メイン

画面の  アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

- (3) [イメージビルダー] 画面で [オペレーティングシステムの登録] をクリックします。[オペレーティングシステムの登録] 画面が表示されます。

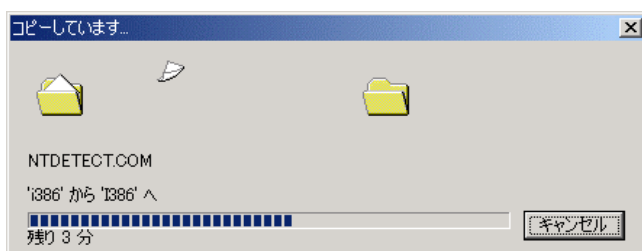


- (4) [オペレーティングシステム名] を入力し、[オペレーティングシステム種別] をプルダウンメニューから選択します。下図は、Windows 2000 Server を登録するときの例です。

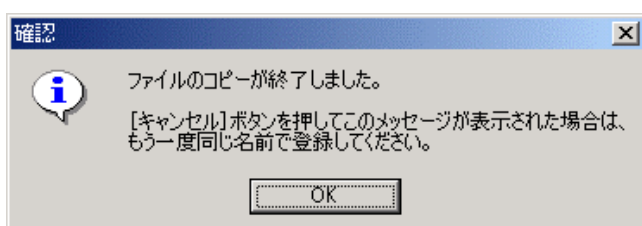


- (5) [OK] をクリックすると「使用許諾契約書」が表示されます。

- (6) [同意する] をクリックするとコピーが開始されます。



- (7) コピーが完了したら [OK] をクリックして、[オペレーティングシステムの登録] 画面に戻り、[閉じる] をクリックして [イメージビルダー] 画面に戻ってください。



- (8) サービスパック/HotFix の適用、ESMPRO/ServerAgent・エクスプレス通報サービスのインストールを行う場合は、「2. サービスパック/HotFix の適用、アプリケーションのインストール」をご覧ください。イメージを登録してください。


重要

サービスパック/HotFix の適用、ESMPRO/ServerAgent・エクスプレス通報サービスのインストールは OS クリアインストールと同一シナリオで実行します。単独で行うことができません。

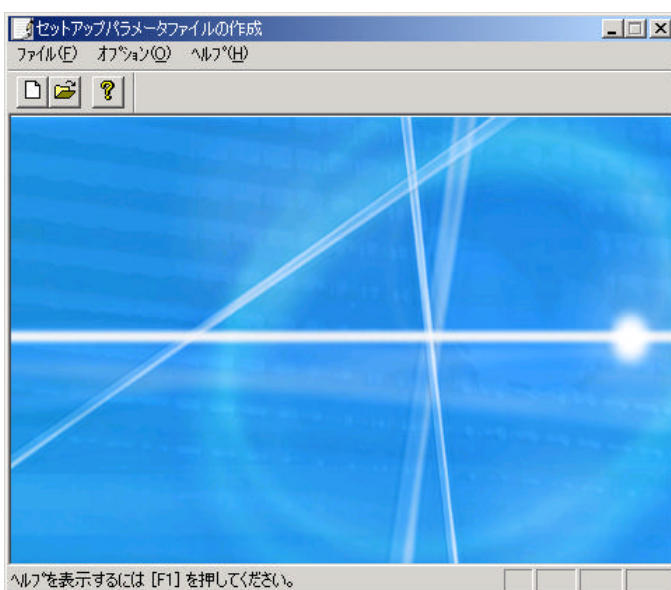
1.2 セットアップパラメータの作成

セットアップパラメータとは、通常 Windows のインストールのセットアップ時に必要な各項目をあらかじめファイルとして保存しておくことで、OSの無人インストールを可能にするものです。ここでは、そのセットアップパラメータの作成方法について説明します。

- (1) [ツール] メニューから [イメージビルダー] を選択し、[イメージビルダー] 画面を表示させます。

メイン画面の  アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

- (2) [セットアップパラメータファイルの作成] をクリックします。[セットアップパラメータファイルの作成] 画面が表示されます。



- (3) [セットアップパラメータファイルの作成] 画面の [ファイル] メニューから [情報ファイル新規作成] を選択します。[基本情報] 画面が表示されます。
- (4) [OS 種別] のプルダウンメニューからインストールする OS を選択します。他の設定は必要に応じて行います。設定が終了したら、[次へ] をクリックします。

(例) Windows 2000 Server をサイズ指定でインストールする場合

基本情報

OS種別: Windows 2000 Server

対象マシン: 自動検出

インストールパス: WINNT

Service Packの適用

パーティション

新規パーティション 全領域

サイズ指定

4095 MB (4095~9999999MB)

既存のパーティション

ファイルシステムをNTFSへ変換

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル ヘルプ

重要

- HDD にパーティションを作成せず、ディスク全体にインストールしたいときは、[全領域] にチェックを入れます。
- インストールする HDD に既にパーティションが作成されているとき、その先頭のパーティションにクリアインストールしたいときは、[既存のパーティション] にチェックを入れます。
- その他変更したい項目がありましたら、[ヘルプ] をクリックして参照してください。

(5) [ユーザ情報] 画面が表示されます。[使用者名] [会社名] [プロダクトキー] を入力し、[次へ] をクリックします。

(例) 使用者名 “ user ”、会社名 “ TEST ”、プロダクトキー “ xxxxxx-xxxxx-xxxxx-xxxxx-xxxxx ” のとき

ユーザ情報

ユーザ情報

使用者名: user

会社名: TEST

プロダクトキー: xxxxxx-xxxxx-xxxxx-xxxxx-xxxxx

国と地域

タイムゾーン: (GMT+09:00) 大阪、札幌、東京

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル ヘルプ

- (6) [コンピュータの役割] 画面が表示されます。ここでは、コンピュータ名を入力します。他の項目は必要に応じて、設定します。設定が終わったら、[次へ] をクリックしてください。

(例) コンピュータ名 “ blade01 ” のとき

コンピュータの役割

コンピュータ名

MACアドレス

ドメイン

ワークグループ

クライアントライセンス

同時使用するユーザ数

アクセスするコンピュータ数

ドメイン参加アカウントの指定

アカウント名

パスワード

パスワード確認

ネットワークの設定

ネットワークの詳細設定を行う

ネットワークの設定をすべてデフォルトでインストールする

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル ヘルプ

- (7) [ドライバの設定] 画面が表示されます。ここでは、とくに必要がなければ、そのまま [次へ] をクリックしてください。

ドライバの設定

ディスプレイの設定

ドライバ

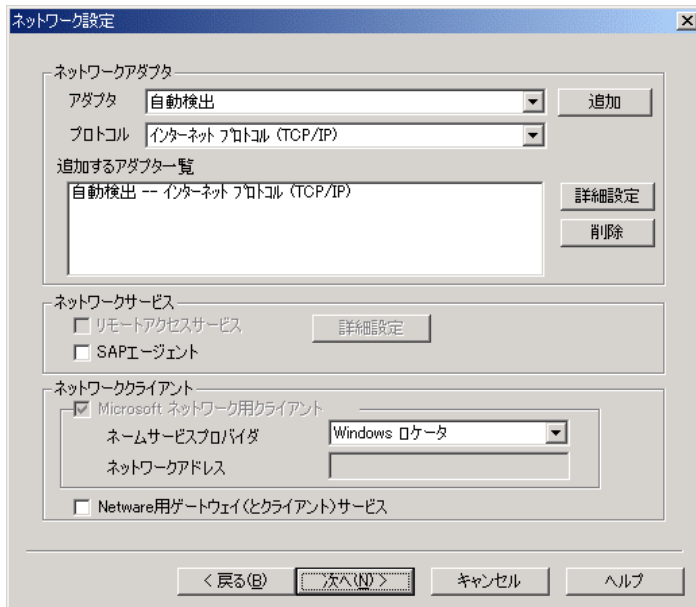
色数

解像度

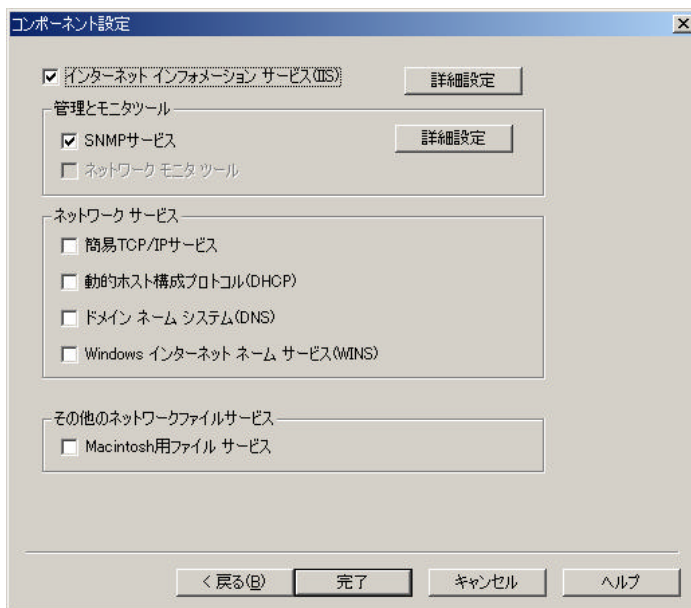
リフレッシュレート

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル ヘルプ

- (8) [ネットワーク設定] 画面が表示されます。[アダプタ] [プロトコル] を選択し、[追加] をクリックします。必要に応じて、他の項目も設定します。設定が終わったら [次へ] をクリックします。下図は [アダプタ] も [プロトコル] もデフォルト設定を用いたときの設定例です。

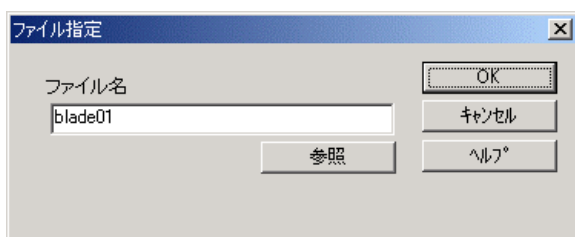


- (9) [コンポーネント設定] 画面が表示されます。ここでは、とくに必要がなければ設定をしなくても構いません。[完了] をクリックして、次に進んでください。



- (10) 下図のような [ファイル指定] 画面が表示されます。ここでは、各種設定をしてきたパラメータファイルの名前を決めることができます。[ファイル名] を入力し、[OK] をクリックしてください。[セットアップパラメータファイルの作成] 画面が表示されたら、パラメータファイルの作成は完了です。

(例) ファイル名 “ blade01 ” を入力したときの例




重要

- [コンピュータの役割]画面で入力するコンピュータ名はDPMに登録しているコンピュータ名にしてください。
- [ファイル指定]画面で入力するファイル名は、できるだけDPMに登録しているコンピュータ名にしてください。シナリオファイルの作成の際、パラメータファイルを「装置名に指定」にすることができ、1つのシナリオファイルで複数のコンピュータに転用できます。
- その他変更したい項目で不明点がありましたら、[ヘルプ]が各画面に用意されていますので、参照してください。各項目の説明が書かれています。

1.3 シナリオファイルの作成

OS クリアインストールの準備ができたので、次にシナリオファイルの作成方法について説明します。

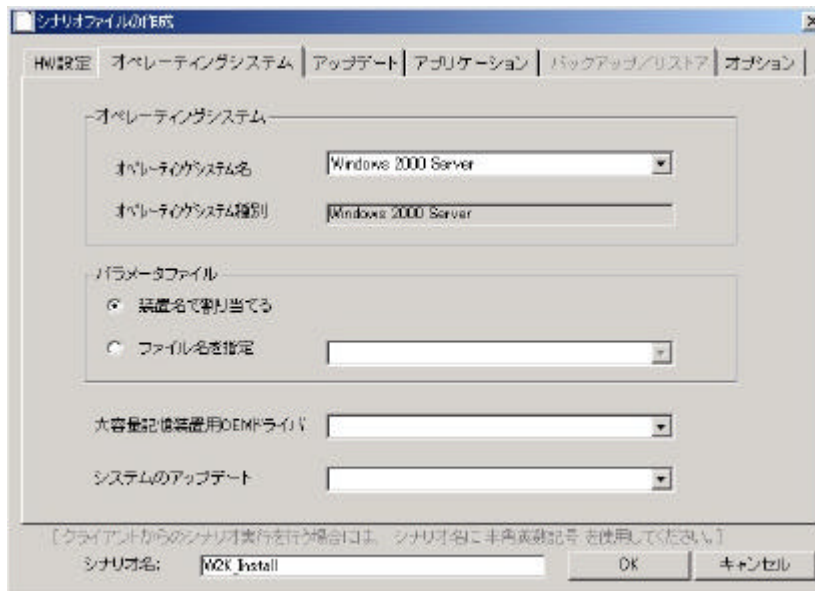
- (1) DPM のメイン画面から [シナリオ]メニュー [シナリオファイルの作成] を選択し、シナリオファイル作成画面を表示させます。メイン画面の  アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。
- (2) Express5800 シリーズに対する OS クリアインストールのシナリオを作成する場合で、AutoRaid の設定を行う場合は [HW 設定] タブを選択して設定を行ってください。設定方法については「5. BIOS/ファームウェアのアップデート」をご覧ください。

注意

Express5800/Na の場合は、AutoRaid はありません。

- (3) [オペレーティングシステム] タブをクリックし、[オペレーティングシステム名] のプルダウンメニューより登録した OS イメージを選択します。次に [シナリオ名] を入力します。下図はシナリオファイル名 “W2K_Install” の Windows 2000 Server の OS クリアインストールのシナリオファイル作成例です。

(例) Windows 2000 server のインストールをシナリオファイルに設定しているシナリオ作成例



ヒント

セットアップパラメータファイル名を装置名で作成しなかった場合は、[パラメータ]の [ファイル名を指定] にチェックを入れて作成したファイルを指定してください。

この画面の各項目の説明は、以下のとおりです。

■ 装置名で割り当てる

OS のインストールを行う時、コンピュータ名と同じセットアップパラメータファイルを自動的に割り当てます。複数のコンピュータにインストールする場合、コンピュータと同じ数だけシナリオを作成する必要がありません。ただし、セットアップパラメータファイルとコンピュータ名は、必ず同じでなければなりません。（ファイル拡張子の.txt は無視します）また、セットアップパラメータファイルはインストールするコンピュータと同じ数だけ作成する必要があります。

■ ファイル名を指定

OS のインストールを行う時、指定したセットアップパラメータファイルを使用します。複数のコンピュータにインストールする場合、コンピュータと同じ数だけシナリオを作成する必要があります。

セットアップパラメータファイルとコンピュータ名は、必ずしも同じである必要はありません。

注意

ファイル名を指定した場合、コンピュータ名はセットアップパラメータファイルで指定したコンピュータ名に変更されます。

■ 大容量記憶装置用 OEM ドライバ

Express5800 シリーズのコンピュータの中には Windows OS の CD - ROM だけでは、その先に接続された HDD に対し、OS インストールができないような、3rd Party 製の SCSI ドライバ、ディスクアレイコントローラのドライバが必要なものがあります。それらのドライバをここで指

定すれば、OS インストールが可能となります。

OEM ドライバの登録については「応用操作編」「8. 登録ツール」をご覧ください。登録後はプルダウンから、登録したモジュールを選択できるようになります。

■ システムのアップデート

Express5800シリーズのコンピュータに対しOSインストール後にシステムのアップデートを行います。

システムのアップデートモジュールの登録については「応用操作編」「8. 登録ツール」をご覧ください。登録後はプルダウンから、登録したアップデートモジュールを選択できるようになります。

重要

Express5800 シリーズの場合、システムのアップデートは必ず行ってください。システムのアップデートは単独で行うことができませんので、システムのアップデートを指定しなかった場合、OS インストール後に EXPRESSBUILDER CD-ROM から手動でシステムのアップデートを行う必要があります。

ヒント

アップデートモジュール名は EXPRESSBUILDER の Ver 名で作成されます。
(例)EXPRESSBUILDER が Ver3.001a - B の場合、登録されるアップデートモジュール名も Ver3.001a - B となります。

- (4) [サービスパック/HotFix の適用、ESMPRO/ServerAgent・エクスプレス通報サービスのインストールを行う場合は、「2. サービスパック/HotFix の適用、アプリケーションのインストール」をご覧ください。OS クリアインストールのシナリオに追加してください。

重要

サービスパック/HotFix の適用、ESMPRO/ServerAgent・エクスプレス通報サービスのインストールは OS クリアインストールと同一シナリオで実行します。単独で行うことができません。

- (5) シナリオ実行時のオプションを設定する場合は、[オプション] タブをクリックします。

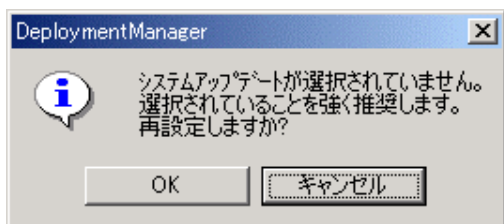
Windows OS が起動しているコンピュータに対しシナリオ実行を行いたい場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れてください。

ヒント

再起動を行うためにはクライアントコンピュータにDPMのサービスがインストールされている必要があります。詳しくは「5. エージェントサービスのインストール」をご覧ください。

シナリオ実行後にコンピュータの電源を OFF にしたい場合は、「実行後に電源を切断する」にチェックを入れてください。


- (6) システムのアップデートを選択しなかった場合、[OK]をクリックすると、以下のような確認メッセージ画面が表示されます。



- (7) システムのアップデートが特に必要がなければ、[キャンセル]をクリックします。シナリオファイルの作成が完了し、メイン画面のシナリオビューに作成したシナリオファイルが追加されます。[OK]を押すと、シナリオ作成画面に戻り、再度、シナリオを編集することができます。


1.4 シナリオ実行

最後に、作成したシナリオを実行する手順を説明します。

- (1) 以下のいずれかの方法で作成したシナリオファイルをコンピュータに割り当てます。
- イメージビューまたは、ツリービューからコンピュータアイコンをクリックし、[コンピュータ]メニューから[シナリオ割当て]を選択します。
 - コンピュータアイコンを右クリックし、[シナリオ] [シナリオ割当て]を選択します。
 - メイン画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、アイコンをクリックします。
 - シナリオビューでシナリオファイルを選択し、ツリービューまたは、イメージビューのコンピュータアイコンにドラッグ&ドロップをして割り当てます。
- (2) シナリオ割当て画面が表示されたら、下図のように青い部分のプルダウンから先ほど作成したシナリオファイルを選択し、[OK]を押す。これで、コンピュータにシナリオを割り当てました。
- (例) シナリオファイル “W2K_Install” のシナリオ割当ての場合

注意

- OS クリアインストールを設定しているシナリオをコンピュータに割り当てると、コンピュータ名をセットアップパラメータで設定した名前に変更してもよいかの旨のメッセージが表示されます。コンピュータ名を変更したくない場合は、[キャンセル] をクリックしてください。[OK] を押すとコンピュータ名が変更されます。
- セットアップパラメータファイルで設定したコンピュータ名と同じコンピュータが DPM に登録されている場合、そのコンピュータ以外にシナリオファイルを割り当てることはできません。割り当てたい場合は、新しくセットアップパラメータファイルを作成するか、登録されているコンピュータ名を変更してください。

(3) シナリオを割り当てたコンピュータをクリックし、[コンピュータ]メニューから[シナリオ実行]を選択します。ただちにシナリオが開始されます。同じ操作を、コンピュータアイコンを右クリックし、[シナリオ] [シナリオ実行]を選択しても行えます。また、コンピュータアイコンを選択し、メイン画面の  アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

(4) イメージビューの[ステータス]欄に“シナリオ実行中”と表示され、OS クリアインストールを行います。

- (5) メニュー画面の [表示] メニュー [シナリオ実行状況] [シナリオ実行一覧] を選択し、[シナリオ実行一覧] 画面を表示します。インストールの進捗状況を見たいときは、シナリオ実行中のコンピュータアイコンを右クリックして [シナリオ進行状況] を選択し、[シナリオ進行状況] 画面を表示させます。
- (6) [シナリオ実行一覧] 画面の [進行状況] に “ 正常終了 ” と表示されたら、シナリオは完了です。

2. サービスパック/HotFix の適用、アプリケーションのインストール

重要

- サービスパック/HotFix の適用、アプリケーションのインストールはターゲットのコンピュータの OS が Windows 2000 以上で実行できます。他の Windows 系 OS や Linux などではご利用になれません。
- アプリケーションインストールは、ESMPRO/ServerAgent、エクスプレス通報サービスのみです。

DPM では、サービスパックや HotFix の適用、アプリケーションのインストールを OS インストールと共にリモートで行うことができます。ここでは、サービスパック/HotFix の適用、アプリケーションのインストール方法について説明しますが、サービスパック/HotFix の適用とアプリケーションのインストールでは、画面が異なるため、項目を分けています。

2.1 サービスパック/HotFix、アプリケーションの登録


サービスパックや HotFix、アプリケーションを DPM に登録する方法を説明します。

重要

Express5800 シリーズ用の RUR の登録を行う場合は、RUR のインストール手順書をよくお読みになってから登録を行ってください。

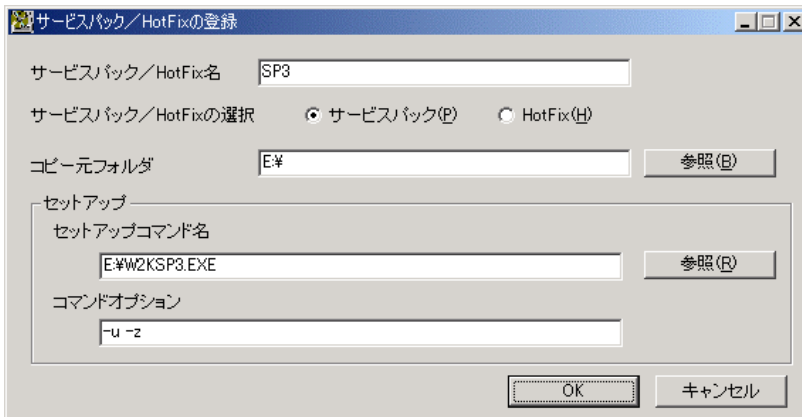
< サービスパック/HotFix の登録 >

- (1) [ツール] メニュー [イメージビルダー] を選択して [イメージビルダー] 画面を表示させます。

メイン画面の  アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

- (2) [イメージビルダー] 画面で [サービスパック/HotFix の登録] をクリックします。[サービスパック/HotFix の登録] 画面が表示されます。
- (3) [サービスパック/HotFix の登録] 画面で各欄を設定します。[コピー元フォルダ] にはサービスパック/HotFix のファイルが格納されているフォルダを指定します。[セットアップコマンド名] にはサービスパック、HotFix のセットアップコマンドを指定します。

(例) Windows 2000 の Service Pack 3 の登録例



重要

登録されたサービスパック/HotFix は、管理サーバの内部フォルダにコピーします。登録に必要な空き容量は、登録するサービスパック/HotFix の容量の約 2 倍です。

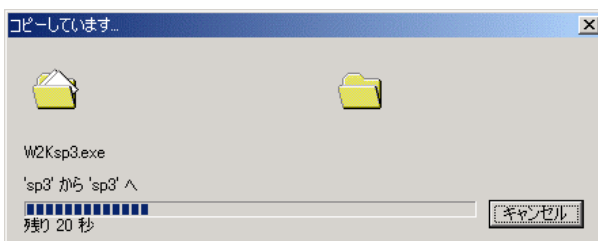
注意

コマンドオプションはサービスパック/HotFix を/h オプションをつけて実行することで調べることができます。「無人モードで更新」と「インストールの完了時に再起動を行わない」設定のコマンドオプションを必ず指定してください。

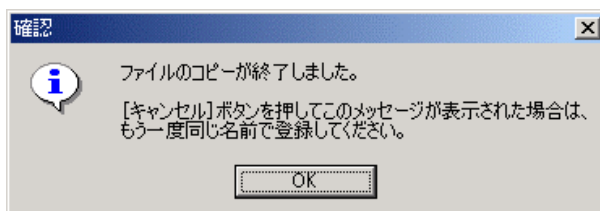
ヒント

Windows 2000 Service Pack 1、2、3、4 および Windows XP Service Pack1 を登録する場合は、コマンドオプションに「-u -z」を指定してください。HotFix の場合は「-u -z」か「-m -z」のどちらかになります。

(4) 設定が終了したら、[OK] をクリックします。以下の画面が表示されます。



(5) サービスパック/HotFix のファイルコピーが終了すると、圧縮処理が開始します。圧縮処理が正常終了すると、以下の画面が表示されます。[OK] を押して [サービスパック/HotFix の登録] 画面が表示されたらサービスパック/HotFix の登録は完了です。イメージビルダーを終了してください。



<アプリケーションの登録>

アプリケーションの登録方法

- (1) [Express5800/BladeServer, Express5800/Na 添付 EXPRESSBUILDER の CD-ROM を準備します。
- (2) 管理サーバ上で添付 EXPRESSBUILDER の CD-ROM を挿入すると表示される MC メニューから[ソフトウェアのセットアップ] [ESMPRO] [DeploymentManager の登録] [エクスプレス通報サービス]または[ESMPRO/ServerAgent]をすると、登録が開始されます。

2.2 シナリオの追加

Windows OS インストールシナリオにサービスパック/HotFix の適用、アプリケーションのインストールを行うシナリオの追加について説明します。

<サービスパック/HotFix 適用のシナリオ追加>

- (1) [アップデート] タブをクリックし、プルダウンメニューより登録したサービスパックと HotFix を選択します。[シナリオ名]を入力します。
(例) SP3 と HotFix をシナリオファイルに設定しているシナリオ作成例

シナリオファイルの作成

HW設定 | オペレーティングシステム | アップデート | アプリケーション | バックアップ/リストア | オプション

サービスパック/Hotfix

1. SP3
2. HotFix
3.
4.
5.
6.
7.
8.

マルチキャスト配信開始条件

最大ターゲット数(1~1000)
最大待ち時間 (1~1440) 分

[クライアントからのシナリオ実行を行う場合は、シナリオ名に 半角英数記号 を使用してください。]

シナリオ名: SP3_HotFix

<アプリケーションインストールのシナリオ追加>

(1) [アプリケーション] タブをクリックし、プルダウンメニューより登録したアプリケーションを選択します。[シナリオ名] を入力します。

(例) アプリケーション “TestAP” をシナリオファイルに設定しているシナリオ作成例

シナリオファイルの作成

HW設定 | オペレーティングシステム | アップデート | **アプリケーション** | バックアップ/リストア | オプション

アプリケーション名

1. TestAP

2.

3.

4.

5.

6.

7.

8.

マルチキャスト配信開始条件

最大ターゲット数(1~1000)

最大待ち時間 (1~1440) 分

[クライアントからのシナリオ実行を行う場合は、シナリオ名に半角英数記号を使用してください。]

シナリオ名: AP_Install

3. RedHat Linux のインストール

DPM を使用することで、Linux をネットワーク経由で自動インストールすることができます。

重要

OS クリアインストールがサポートする Linux OS は以下のとおりです。

- RedHat Linux 7.2、7.3、8.0、RedHat Enterprise Linux AS

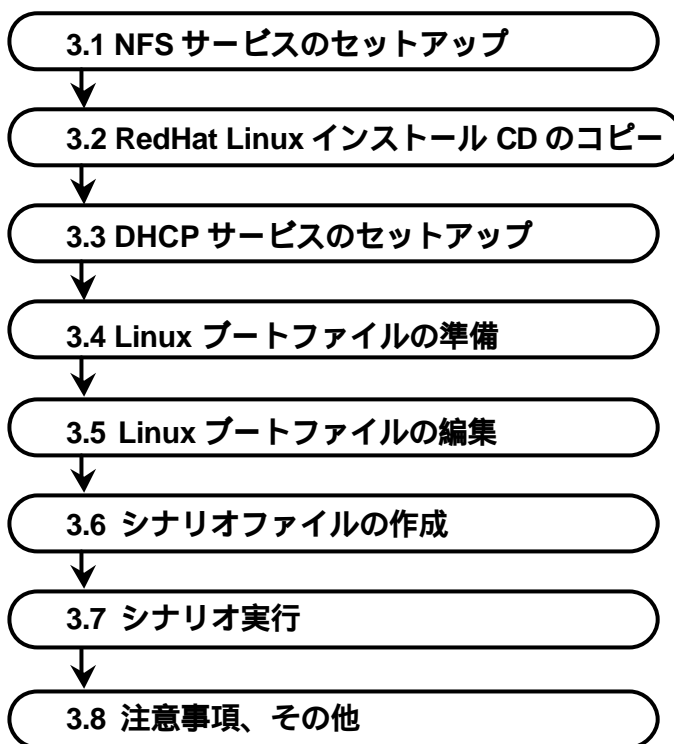
上記以外の OS は DPM から OS クリアインストールすることはできません。ご注意ください。

Express5800/420Ma, Express5800/Na には、市販ディストリビューションの RedHat Linux はインストールできません。

ここでは、コンピュータに対して RedHat Linux 8.0 をインストールするための DPM の設定、及び操作手順を説明します。

RedHat Linux 8.0 以外の対応バージョンについても基本操作は同じです。8.0 との相違点については、次の「各バージョンの設定方法」をご覧ください。

シナリオ実行までの流れ



各バージョンの設定方法

8.0 以外の各バージョンをインストールする場合はこれまでの説明から 8.0 の記述部分を各バージョンに置き換えて操作します。

「EXPRESSBUILDER CD-ROM 内 DPML」の設定ファイルを使用する場合はバージョン番号の記述を以下

のように読み替えてください。

RedHat Linux 7.2 の場合	8.0	7.2
RedHat Linux 7.3 の場合	8.0	7.3
RedHat Linux Enterprise Linux AS の場合	8.0	AS2.1

ヒント

インストールに必要なファイルは

- RedHat Linux のインストール CD の内容
- initrd.img、vmlinuz ファイル
- キックスタートファイル (ks8.0.cfg)
- パラメータファイル (syslinux8.0.cfg)
- PXE ブートファイル (pxelinux.bin)

です。

ヒント

インストールを行うコンピュータが市販のパッケージ品で動作する事とネットワーク経由でインストール可能な事を確認してからインストールを行ってください。

以降の章で説明するインストール手順では、以下の CD - ROM が必要になります。

- RedHat Linux 8.0 インストール CD1
- RedHat Linux 8.0 インストール CD2
- RedHat Linux 8.0 インストール CD3

注意

RedHat Linux 7.2 の場合、インストール CD3 はありません。

NFS サービスを Windows 2000 上に構築する場合は、以下の CD - ROM も必要になります。
NFS サービスのインストール手順については、製品に添付のマニュアルをご参照ください。

- Microsoft (R) Windows (R) Services for UNIX 2.0

重要

DPMを使用したRedHat Linux 8.0のネットワークインストールを行うには、DPM以外に、DHCP サービス、NFS サービスが必要になります。
DHCP サービス、NFS サービスは、Windows 2000 以外でも構いません (例えば、Linux 上に構築したものを使用することもできます)。

3.1 NFS サービスのセットアップ

< Linux インストール出荷モデル/市販ディストリビューション共通 >

最初に、NFS サービスをセットアップします。NFS サーバを構築してください。Windows 2000 上に構築する場合は、Services for UNIX 2.0 をインストールします。Services for UNIX 2.0 の CD - ROM を挿入するとインストーラが自動起動するので指示に従ってインストールしてください。インストール後に再起動が必要になります。

重要

Services for UNIX 2.0 はクライアントアクセスライセンス (CAL) による制限を受けます。詳しくは「2.5 複数のコンピュータに OS クリアインストールのシナリオを同時実行する際の注意点」をご覧ください。詳しくは Services for UNIX 2.0 のマニュアルをご覧ください。

注意

Services for UNIX 2.0 は Windows XP と Windows Server 2003 にインストールすることができません。Services for UNIX 2.0 を使用して NFS サーバを構築する場合は、Windows 2000 上に構築してください。

ヒント

Services for UNIX 2.0 をインストールするだけで NFS サーバとして使用することができます。設定は特に必要ありません。Services for UNIX 2.0 をインストールすると、ファイル/フォルダのプロパティに [NFS 共有] のタブが追加されます。

Linux上でNFSサーバの起動を行うには以下のコマンドを実行してください。

```
# /etc/rc.d/init.d/portmap restart
# /etc/rc.d/init.d/nfs stop &> /dev/null
# /etc/rc.d/init.d/nfs start
```

起動時にNFSのサービスを有効化するために以下のコマンドを実行してください。

```
# /sbin/chkconfig --level 345 portmap on
# /sbin/chkconfig --level 345 nfs on
```

3.2 RedHat Linux インストール CD のコピー

< Linux インストール出荷モデル (Express5800/BladeServer) の場合 >

Linuxインストール出荷モデルの場合のRedHat LinuxインストールCDのコピーについて説明します。

注意

ディレクトリを作成する場合は、大文字/小文字に注意してください。

- (1) ディスク容量が 3GByte 以上空いているドライブ上に、“ exports ” という名前のディレクトリを作成します。
- (2) “ exports ” にサブディレクトリ “ redhat ” という名前のディレクトリを作成します。
- (3) “ redhat ” にサブディレクトリ “ blade ” と “ blade-ks ” という名前のディレクトリを作成します。
- (4) CD ドライブに 「 RedHat Linux 7.3 インストール CD1 」 をセットし、全てのファイル/ディレクトリを (3) で作成した “ blade ” ディレクトリにコピーします。
- (5) CD ドライブに 「 RedHat Linux 7.3 インストール CD2 」 をセットし、全てのファイル/ディレクトリを (3) で作成した “ blade ” ディレクトリにコピーします。ファイルを上書きするか聞かれたら、「全て上書き」を選択します。

注意

RedHat Linux7.2 の場合、「RedHat Linux インストール CD2」の代わりに「Linux 基本サービスセット ソフトウェア CD - ROM」を使用してください。

- (6) CD ドライブに 「 Linux 基本サービスセット ソフトウェア CD - ROM 」 をセットし、全てのファイル/ディレクトリを (3) で作成した “ blade ” ディレクトリにコピーします。ファイルを上書きするか聞かれたら、「全て上書き」を選択します。
- (7) (1) で作成したディレクトリを exports として NFS で公開します。Services for UNIX2.0 を使用する場合は、“ exports ” ディレクトリのプロパティ画面を開き、[NFS 共有] タブをクリックして “ exports ” の共有名でディレクトリを共有してください。

<市販ディストリビューションの場合>

市販ディストリビューションの場合の RedHat Linux インストール CD のにコピーについて説明します。

注意

ディレクトリを作成する場合は、大文字/小文字に注意してください。

- (1) ディスク容量が 3GByte 以上空いているドライブ上に、“ exports ” という名前のディレクトリを作成します。
- (2) “ exports ” にサブディレクトリ “ ks ” というディレクトリを作成します。
- (3) “ exports ” ディレクトリにサブディレクトリ “ redhat8.0 ” を作成します。
- (4) CD ドライブに 「 RedHat Linux 8.0 インストール CD1 」 をセットし、全てのファイル/ディレクトリを (3) で作成した “ redhat8.0 ” ディレクトリにコピーします。

- (5) CD ドライブに「RedHat Linux 8.0 インストール CD2」をセットし、全てのファイル/ディレクトリを(3)で作成した“redhat8.0”ディレクトリにコピーします。ファイルを上書きするか聞かれたら、「全て上書き」を選択します。
- (6) CD ドライブに「RedHat Linux 8.0 インストール CD3」をセットし、全てのファイル/ディレクトリを(3)で作成した“redhat8.0”ディレクトリにコピーします。ファイルを上書きするか聞かれたら、「全て上書き」を選択します。
- (7) (1)で作成したディレクトリを exports として NFS で公開します。Services for UNIX2.0 を使用する場合は、“exports”ディレクトリのプロパティ画面を開き、[NFS 共有]タブをクリックして“exports”の共有名でディレクトリを共有してください。

ヒント

空き容量が 3GByte というのは RedHat Linux 8.0 を扱う場合です。複数のバージョンを同時に扱う場合はそれぞれの Setup ファイル用にインストール CD の全内容を収めるだけの HDD の空き容量が必要です。

3.3 DHCP サービスのセットアップ

< Linux インストール出荷モデル/市販ディストリビューション共通 >

ここでは、特別な設定は必要ありません。通常の DHCP サーバの設定を行ってください (IP アドレスがリース可能な状態にあることを確認してください)。

ただし、Windows 2000 Server 標準添付の DHCP サービス以外を使用して DHCP サーバを構築する場合は、次の点に注意してください。

固定アドレスの使用

例えば Linux を使って DHCP サーバを構築する場合、dhcpd.conf に固定アドレスの指定が必要になる場合があります。

固定アドレスとは、管理対象となる CPU ブレードの MAC アドレスと、リース予定の IP アドレスの組をあらかじめ DHCP サーバに登録しておくことにより、CPU ブレードからのアドレス要求に対して DHCP サーバが固定の IP アドレスをリースする仕組みです。

固定アドレスの記述がない場合、DHCP サーバからの応答遅延が発生する場合があります。その場合 PXE 起動 (ネットワーク起動) が失敗し、その影響で DeploymentManager が正常に動作できません。

Linux 以外の UNIX 系 OS についても、同様に固定アドレスが必要になる場合があります。

以下は、MAC アドレス (12:34:56:78:9A:BC) のホストに固定アドレスを指定した場合の/etc/dhcpd.conf の例です。

```

subnet 192.168.0.0 netmask 255.255.255.0 {
    ...
    ...
    host computer-name {
        hardware ethernet 12:34:56:78:9A:BC;
        fixed-address 192.168.0.32;
    }
}

```

3.4 Linux ブートファイルの準備

< Linux インストール出荷モデル (Express5800/BladeServer) の場合 >

Express5800 シリーズで Linux インストール出荷モデルの場合の Linux ブートファイルの準備について説明します。

initrd.img、vmlinuz ファイルのコピーを行います。

- (1) 「Linux 基本サービスセット ソフトウェア CD - ROM」からファイル/フォルダをコピーします。CD - ROM の¥nec¥Linux¥tftpboot¥pxelinux 配下の全ファイル/フォルダを、フォルダ構造を保ったまま以下のフォルダにコピーします。

< DPM インストールフォルダ > ¥PXE¥Images¥pxelinux

ヒント

「DPM インストールフォルダ」は変更していない場合、以下のフォルダになります。(ドライブ名は異なる可能性があります。)

C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥PXE¥Images¥pxelinux

ks.cfg、syslinux.cfg ファイルのコピー

- (1) 「Linux 基本サービスセット ソフトウェア CD - ROM」の¥nec¥Linux¥kickstart¥ks.cfg ファイルを以下のフォルダにコピーします。

C:¥exports¥ks

ヒント

「3.2 Red Hat Linux インストール CD のコピー」の(2)で作成したフォルダです(ドライブ名は異なる可能性があります)。

- (2) 「Linux 基本サービスセット ソフトウェア CD - ROM」の¥nec¥Linux¥kickstart¥syslinux.cfg を以下のフォルダにコピーします。

< DPM 共有フォルダ > ¥Ansfile¥Linux

ここに格納するファイルがシナリオ作成の時の、[オペレーティングシステム] タブのパラメータファイル選択リストに表示されます。また、シナリオ作成時にパラメータファイルをコンピュータ名で自動割当をするときは、コンピュータ名とファイルの拡張子も含めて完全に一致するファイル名にしてください。

ヒント

DPM の「共有フォルダ」の設定は、[ファイル] メニューから [詳細設定] を選択し、[全般] タブを参照することで確認できます。DPM の「共有フォルダ」は、変更していない場合、以下のフォルダになります。(ドライブ名は異なる可能性があります。)

C:¥Deploy¥Ansfile¥Linux

重要

ここでコピーしたファイルは実際のネットワーク構成に合わせるためにファイル編集が必要になります。また、RedHat Linux のバージョンによって使用する CD - ROM が違います。詳しくは、以下の手順書を参照して下さい。

「Express5800/Linux インストール代行サービス手順書」

< 市販ディストリビューションの場合 >

市販ディストリビューションの場合の Linux ブートファイルの準備について説明します。

initrd.img、vmlinuz ファイルのコピーを行います。

- (1) 「RedHat Linux 8.0 インストール CD1」を CD - ROM ドライブに挿入します。
- (2) 作業用の空のフロッピーディスクを 1 枚用意し、フロッピーディスクドライブに挿入します。
- (3) コマンドプロンプトを起動し以下のとおり実行します。

D:¥dosutils¥rawrite.exe -f D:¥images¥bootnet.img -d A: -n

注意

- フロッピーディスク内のデータは、全て上書きされますのでご注意ください。
- "D:"は CD - ROM ドライブを、"A:"はフロッピーディスクドライブを指定してください。

- (4) フロッピーディスクの作成が完了したらフロッピーディスク内に作成された initrd.img と vmlinuz ファイルを以下のフォルダにコピーします。

< DPM インストールフォルダ > ¥PXE¥Images¥pxelinux¥RedHat8.0

ヒント

- 「DPM インストールフォルダ」は初期設定では、以下のフォルダになります（ドライブ名は異なる場合にあります）。フォルダが存在しない場合は作成してください。
C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥PXE¥Images¥pxelinux¥RedHat8.0
- コピー後のフォルダ構成は、以下のようになります。
PXE¥Images¥pxelinux¥RedHat8.0¥initrd.img
¥RedHat8.0¥vmlinuz

ks8.0.cfg、syslinux8.0.cfg ファイルのコピー

- (3) 「EXPRESSBUILDER CD-ROM」から、¥DPML¥Linux¥kickstart¥ks8.0.cfg ファイルを以下のフォルダにコピーします。

C:¥exports¥ks

ヒント

「3.2 Red Hat Linux インストール CD のコピー」の(2)で作成したフォルダです（ドライブ名は異なる可能性があります）。

- (4) 「EXPRESSBUILDER CD-ROM」から
¥DPML¥Linux¥kickstart¥syslinux8.0.cfg ファイルを以下のフォルダにコピーします。

< DPM 共有フォルダ > ¥Ansfile¥Linux

ヒント

DPM の「共有フォルダ」の設定は、[ファイル]メニューから[詳細設定]を選択し、[全般]タブを参照することで確認できます。DPM の「共有フォルダ」は、変更していない場合、以下のフォルダになります。（ドライブ名は異なる可能性があります。）

C:¥Deploy¥Ansfile¥Linux

3.5 Linux ブートファイルの編集

< Linux インストール出荷モデル (Express5800/BladeServer) の場合 >

Linux インストール出荷モデルの場合の Linux ブートファイルの編集方法について説明します。

ks.cfg ファイルの編集

exports¥redhat¥blade-ks ディレクトリにコピーした ks.cfg を環境に合わせて編集します。nfs から始まる行で NFS サーバの指定、part から始まる行でパーティション分割の設定を行います（パーティション分割が不要な場合は、下線部分のみになります）。

重要

ファイルの保存時には改行コードが LF のみとなるようにしてください。Windows 2000 では標準で、CR+LF となります。NOTEPAD では自動的に改行コードが CR+LF となってしまうので編集の際には LF のみで保存できるエディタをご使用ください。

ヒント

- CR は Carriage Return (キャリッジリターン) の略で行の先頭に戻すことです。LF はラインフィードの略で一行送ることです。
- CR+LF とは 1 行送って行の先頭に戻すことです。MS - DOS や Windows テキストファイルでは、この 2byte で改行を表します。

```
nfs --server 192.168.0.4 --dir /exports/redhat/blade
part /boot --fstype ext2 --size=100 --ondisk hda
part swap --size=1024 --ondisk hda
part / --fstype ext2 --size=2048 --grow --asprimary --ondisk hda
```

注意

システムの安定性を重視して、デフォルトでは ext3 のところを ext2 でパーティションのフォーマットをしています。

ヒント

ks ファイルの詳細な編集方法については、以下の RedHat Linux 社のホームページをご覧ください。

- RedHat Linux7.2 の場合
<http://www.jp.redhat.com/manual/Doc72/RH-DOCS/rhl-cg-ja-7.2/index.html>
の「1章キックスタートインストール」
- RedHat Linux7.3 の場合
<http://www.jp.redhat.com/manual/Doc73/RH-DOCS/rhl-cg-ja/index.html>
の「1章キックスタートインストール」
- RedHat Linux8.0 の場合
<http://www.jp.redhat.com/manual/Doc80/RH-DOCS/rhl-cg-ja-8.0/index.html>
の「6章キックスタートインストール」

syslinux.cfg ファイルの編集

Ansfile¥Linux ディレクトリにコピーした syslinux.cfg を環境に合わせて編集します(下線部分を、NFS サーバの IP アドレスに変更します)。

重要

ファイルの保存時には改行コードが LF のみとなるようにしてください。Windows 2000 では標準で、CR+LF となります。NOTEPAD では自動的に改行コードが CR+LF となってしまうので編集の際には LF のみで保存できるエディタをご使用ください。

```
prompt 0
timeout 50
default blade-bto
label blade-bto
    kernel RedHat/blade/vmlinuz
    append
initrd=RedHat/blade/initrd.img
ks=nfs:192.168.0.4:/exports/redhat/blade-ks/ks.cfg
```

<市販ディストリビューションの場合>

ks8.0.cfg ファイルの編集

exports¥ks ディレクトリにコピーした ks8.0.cfg を環境に合わせて編集します。nfs から始まる行で NFS サーバの指定、part から始まる行でパーティション分割の設定を行います（パーティション分割が不要な場合は、下線部分のみになります）。

重要

ファイルの保存時には改行コードが LF のみとなるようにしてください。Windows 2000 では標準で、CR+LF となります。NOTEPAD では自動的に改行コードが CR+LF となってしまうので編集の際には LF のみで保存できるエディタをご使用ください。

ヒント

- CR は Carriage Return（キャリッジリターン）の略で行の先頭に戻すことです。LF はラインフィードの略で一行送ることです。
- CR+LF とは 1 行送って行の先頭に戻すことです。MS - DOS や Windows テキストファイルでは、この 2byte で改行を表します。

```
nfs --server 192.168.0.4 --dir /exports/redhat8.0/
part /boot --fstype ext2 --size=100 --ondisk hda
part swap --size=1024 --ondisk hda
part / --fstype ext2 --size=2048 --grow --asprimary --ondisk hda
```

注意

システムの安定性を重視して、デフォルトでは ext3 のところを ext2 でパーティションのフォーマットをしています。

ヒント

ks ファイルの詳細な編集方法については、以下の RedHat Linux 社のホームページをご覧ください。

- RedHat Linux7.2 の場合
<http://www.jp.redhat.com/manual/Doc72/RH-DOCS/rhl-cg-ja-7.2/index.html>
の「1 章キックスタートインストール」

- RedHat Linux7.3 の場合
<http://www.jp.redhat.com/manual/Doc73/RH-DOCS/rhl-cg-ja/index.html>
の「1章キックスタートインストール」
- RedHat Linux8.0 の場合
<http://www.jp.redhat.com/manual/Doc80/RH-DOCS/rhl-cg-ja-8.0/index.html>
の「6章キックスタートインストール」

syslinux8.0.cfg ファイルの編集

Ansible¥Linux ディレクトリにコピーした syslinux8.0.cfg を環境に合わせて編集します（下線部分を、NFS サーバの IP アドレスに変更します）。

重要

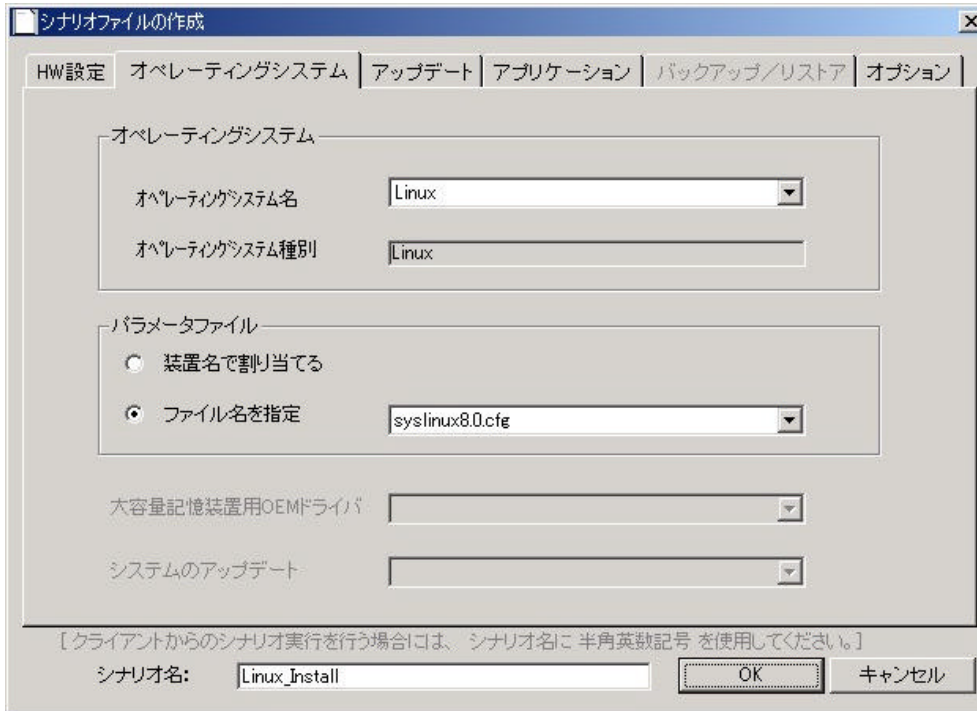
ファイルの保存時には改行コードが LF のみとなるようにしてください。Windows 2000 では標準で、CR+LF となります。NOTEPAD では自動的に改行コードが CR+LF となってしまうので編集の際には LF のみで保存できるエディタをご使用ください。

```
prompt 0
timeout 50
default blade-bto
label blade-bto
    kernel RedHat8.0/vmlinuz
    append
initrd=RedHat8.0/initrd.img
ks=nfs:192.168.0.4:/exports/ks/ks8.0.cfg
```

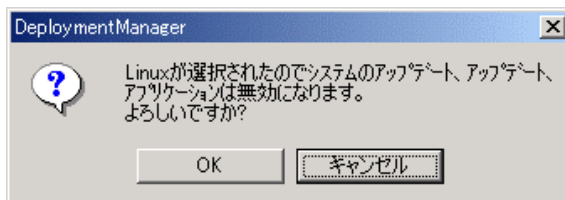
3.6 シナリオファイルの作成

< Linux インストール出荷モデル/市販ディストリビューション共通 >

シナリオの作成と、シナリオの割り当てを行います。操作方法については、「2.3 シナリオファイルの作成」を参照してください。下図のような [シナリオファイルの作成] 画面になります。シナリオファイル作成時には、下記に注意してください



- RedHat Linux のインストールでは、サービスパック/HotFix、アプリケーションインストールの機能を同時に設定することはできません。
- [オペレーティングシステム] での [オペレーティングシステム名] で [Linux] を選択すると、下図のメッセージが表示されます。[OK] を押すと、[アップデート] タブや [アプリケーション] タブに設定されている場合は、内容がクリアされます。



- [パラメータファイル] では、[ファイル名を指定] にチェックを入れ、[syslinux8.0.cfg] を選択してください。

3.7 シナリオ実行

< Linux インストール出荷モデル市販ディストリビューション共通 >

シナリオ実行により、RedHat Linux 8.0 のインストールが開始されます。操作方法については、の「2.4 シナリオ実行」を参照し、同様の手順で行ってください。

注意

「インストール実行時に、USB機器を以下の様に接続していると、インストールが中断する場合があります。インストール実行時はUSB機器を何も接続しない状態で行うか、以下の接続構成以外の状態でインストールを行ってください。

- キーボードとフロッピーディスクドライブを接続、さらに、キーボードのUSBポートにCD-ROMのみを接続」

3.8 注意事項、その他

< Linux インストール出荷モデル/市販ディストリビューション共通 >

注意事項とその他について説明します。

(1) インストールされる RedHat Linux 8.0 のパッケージは、インストールタイプとして「サーバシステム」を選択し、「サーバシステム」タイプのインストール可能な追加パッケージ全てを選択した場合と同等のインストールを行います。通常の「RedHat Linux 8.0」と以下の点が異なります。

- Intel の LAN ボード使用時のドライバを"eepro100"から"e100"に変更しています。Express5800/420Ma の場合は "e1000" です。
- ネットワークの設定が DHCP サーバを使用するように設定されています。
- telnet でログイン可能にする為、xinetd と ファイアウォールの設定で telnet を許可にしております。
- telnet ログインする為のユーザ blade を作成しています。(パスワード:bladeserver)

(2) インストール直後の root パスワードは、以下のように初期設定されています。ログイン後、すぐに変更してください。

login: root

password: necblade

4. エージェントサービスのインストール

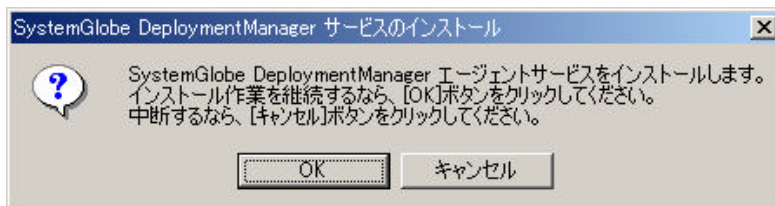
エージェントサービスをインストールすると、以下のような事が可能になります。

- リモートシャットダウン
- 管理サーバへの OS/サービスパック/HotFix 情報の送信
- シナリオ実行時の再起動の強制実行

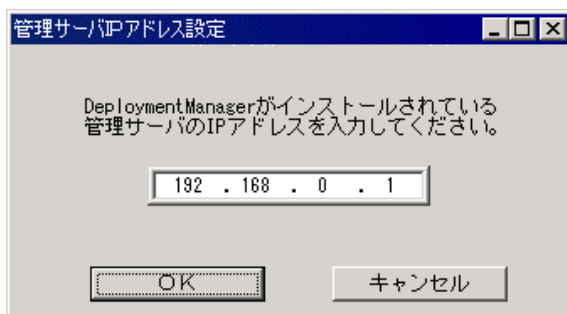
尚、ターゲットのコンピュータに DPM を使用して OS クリアインストールを行った場合は、自動的にエージェントサービスがインストールされています。

エージェントサービスを手動でインストールする場合は、以下の手順を行ってください。

- (1) ターゲットコンピュータに、Administrator 権限をもったユーザでログインする。
- (2) EXPRESSBUILDER CD-ROM をターゲット側のコンピュータの CD ドライブにセットします。
- (3) エクスプローラ等で、[CD ドライブ] [DPML] [TOOLS] [SERVICES] まで移動します。
- (4) [SERVICES] フォルダ内の [UPDATE.VBS] をダブルクリックします。下の画面が表示されます。



- (5) [OK] をクリックします。[管理サーバの IP アドレス設定] 画面が表示されるので、管理サーバ(DPM がインストールされているマシン) の IP アドレスを入力し、[OK] をクリックします。エージェントサービスのインストールが開始されます。下はい P アドレスの入力の例です。



- (6) インストールが完了すると、下のメッセージが表示されます。



(7) [OK] をクリックします。すると、下のメッセージが表示されます。



(8) [OK] をクリックします。リモートアップデートサービスのインストールが開始します。インストールが完了すると、下のメッセージが表示され、サービスのインストールは完了です。

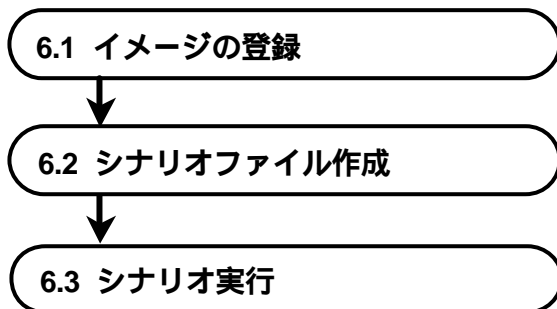


5. BIOS/ファームウェアのアップデート

BIOS/ファームウェアのアップデート機能を使うことによって、BIOS やファームウェアのアップデートのフロッピーディスクイメージを DPM へ登録してネットワークを介して配信することができます。フロッピーディスクサイズ (1.44MB) までのものに限りませんが自作した、フロッピーディスク単体として起動できるように作成したツールを DPM を使用して配信、実行することもできます。Express5800 シリーズの装置に対しては AutoRaid の設定を行う事もできます。

Express5800/Na には AutoRaid はありません。


シナリオ実行までの流れ

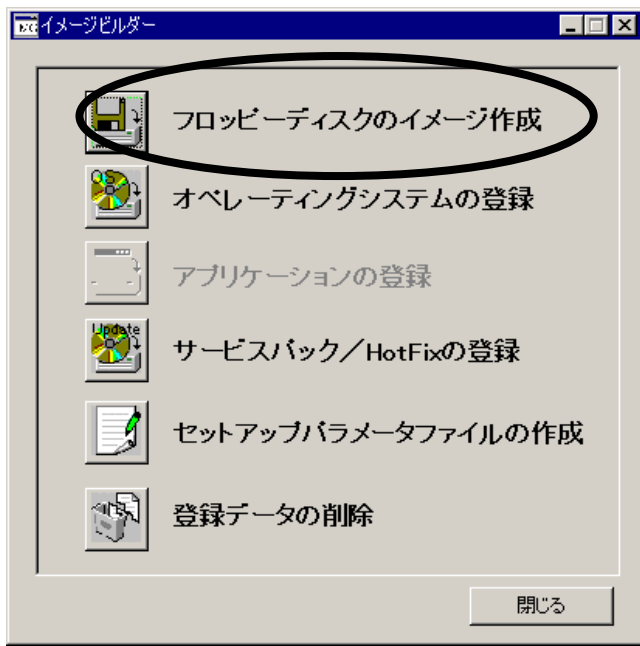


5.1 イメージの登録

イメージの登録方法にはイメージビルダーを使用する方法と登録ツールを使用する方法の 2 種類があります。登録ツールを用いますと AutoRaid の設定用のイメージを作成することができます。

イメージビルダーを用いてフロッピーディスクのイメージを DPM に登録する方法について説明します。はじめに、DPM に登録する BIOS/ファームウェアのアップデートイメージデータがあるフロッピーディスクを用意します。用意ができたなら、管理サーバ側のフロッピーディスクドライブにフロッピーディスクを挿入します。

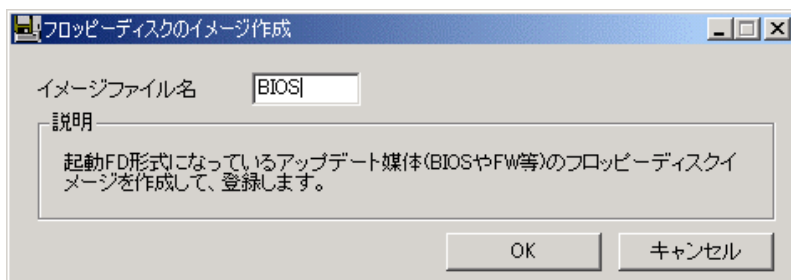
- (1) [スタート]メニューから [プログラム] [SystemGlobe DeploymentManager] [SystemGlobe DeploymentManager Lite] を選択して、DPM を起動します。メイン画面が表示されます。
- (2) [ツール]メニューから [イメージビルダー] を選択し、下図のような [イメージビルダー] 画面が表示します。メイン画面の  アイコンをクリックしても表示することができます。



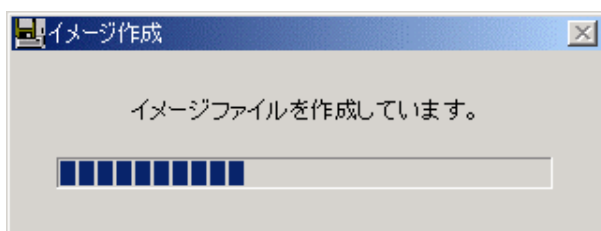
(3) [フロッピーディスクのイメージ作成] をクリックします。

(4) [フロッピーディスクのイメージ作成] 画面が表示されたら、例として下図のようにイメージファイル名を入力し、[OK] をクリックします。

(例) イメージファイル名を “ BIOS ” とした場合のフロッピーディスクイメージ作成画面



(5) 下図の画面が表示され、DPM への登録が開始されます。



(6) 下図の確認画面が表示されたら、登録完了です。[OK] をクリックしてください。



登録ツールを使用したイメージの登録方法について説明します。

RAID 設定イメージファイルの作成方法

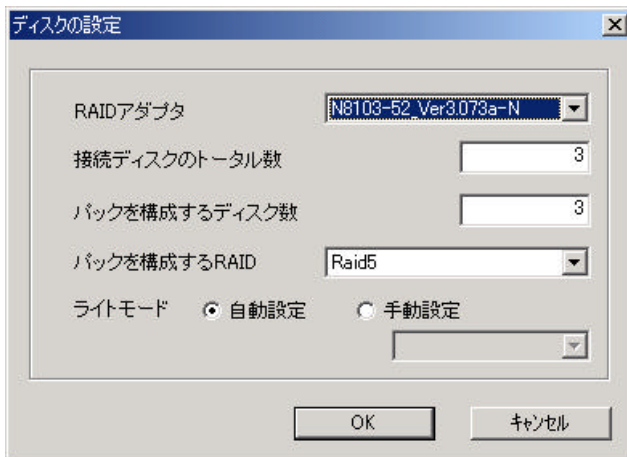
ここでは、DPM を使用して、RAID の設定を行う場合に作成する RAID 設定イメージファイルの作成方法を説明します。

(1) AutoRaid モジュールを、DPM に登録する。

登録方法については「応用操作編」「8. 登録ツール」をご覧ください。

(2) RAID 情報ファイルの作成を行う。

[ツール] メニュー [イメージビルダー] を選択しイメージビルダーを起動させます。 [セットアップパラメータファイルの作成] を選択し [セットアップパラメータファイルの作成] 画面を表示させます。 [オプション] メニューから、 [RAID 設定] の [RAID 情報ファイル新規作成] を選択します。



[ディスクの設定] 画面が表示されます。

以下の各項目を設定します。

■ RAID アダプタ

設定するディスクアレイコントローラを指定します。(1)で登録したモジュールを選択してください。

■ 接続ディスクのトータル数

接続されているディスクのトータル数を入力します。

■ バックを構成するディスク数

1つのフィジカルバックを構成するハードディスクの台数を指定します。

■ バックを構成する RAID

RAID レベルを指定します。

■ ライトモード

書き込みモードを指定します。手動設定の場合は以下の2つより指定できます。

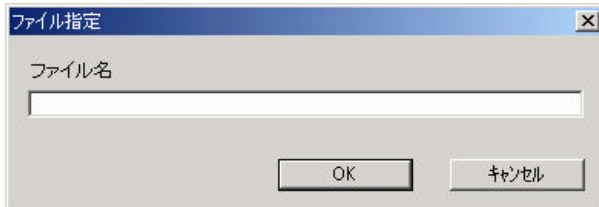
「WRITE_THRU」：データの書き込み時、データの HDD への書き込み完了を待つ命令終了とする方式

「WRITE_BACK」：データの書き込み時、キャッシュにデータを書き込んだ時点で命令終了とする方式

注意

ディスクアレイコントローラにより設定できる項目、範囲が異なります。詳しくは装置添付のユーザズガイド、または各コントローラの説明書を参照してください。

(3) [OK] ボタンをクリックする。



[ファイル指定] 画面が表示されます。

(4) 保存するファイル名を指定して、[OK] をクリックする。

RAID 情報ファイルが作成されます。

ヒント

- ファイル名は半角 25 文字まで入力できます。ただし、¥ / : , ; * ? " < > | . は使用できません。
- 作成した RAID 情報ファイルを修正する時は、[RAID 設定] の [RAID 情報ファイル修正] を選択してください。

(5) RAID 設定イメージファイルの作成を行う。

[セットアップパラメータファイルの作成] 画面の [オプション] メニューから、[RAID 設定] の [RAID 設定イメージファイルの作成] を選択する。

[RAID 情報ファイルの選択] ダイアログ画面が表示されます。

(6) (4)で作成した RAID 情報ファイルを選択して、[OK] をクリックする。

[RAID 設定イメージファイルの保存] ダイアログ画面が表示されます。



(7) 保存するファイル名を指定して、[OK] をクリックする。

以下のメッセージが表示されます。

(8) [OK] をクリックする。

以上で、RAID 設定イメージファイルの作成は完了です。

注意

■RAID 設定イメージファイルと DeleteAllPartition を同時にシナリオファイルに設定するときは、必ず DeleteAllPartition を最初に設定してください。

■登録した RAID 設定イメージファイルの順番は正しく指定してください。例えば EXPRESSBUILDER Ver3.004b - B を使用して RAID1 を構築される場合は以下の順番で指定してください。

RAID1_1st


RAID1_2nd

■DPMを使用してRAIDを構築される場合は、新規にOSをインストールする必要があります。

■DPMを使用してRAIDを構築される場合は、シナリオタイムアウト時間を大きくしてください。シナリオタイムアウト時間の設定方法については、「導入編」「3 DPMを初めてお使いになる前に（初回起動時）」の「3.1 DPMの起動」をご覧ください。

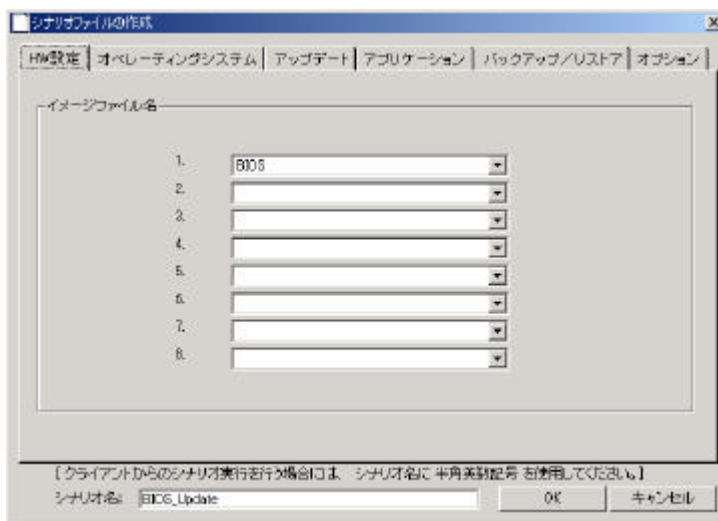
5.2 シナリオファイル作成

BIOS/ファームウェアアップデートのシナリオ作成について説明します。

(1) DPM のメイン画面から [シナリオ] メニュー [シナリオファイルの作成] を選択し、シナリオファイル作成画面を表示させます。メイン画面の  アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

(2) [HW 設定] タブをクリックし、プルダウンメニューより登録したフロッピーディスクイメージを選択します。次に [シナリオ名] を入力します。

(例) イメージファイル“ BIOS ”をシナリオファイルに設定しているシナリオ作成例



注意

DPM ではあらかじめ「DeleteAllPartition」イメージが登録されています。DeleteAllPartition を選択してシナリオを作成し、シナリオ実行を行うと HDD のパーティション情報が削除されて OS が起動できなくなってしまう。

(3) シナリオ実行時のオプションを設定する場合は、[オプション] タブをクリックします。

Windows OS が起動しているコンピュータに対しシナリオ実行を行いたい場合は、「シナリオ実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れてください。

ヒント

再起動を行うためにはクライアントコンピュータにDPMのサービスがインストールされている必要があります。詳しくは「4. エージェントサービスのインストール」をご覧ください。


シナリオ実行後にコンピュータの電源を OFF にしたい場合は、「実行後に電源を切断する」にチェックを入れてください。

(4) [OK] をクリックします。これで、シナリオビューに新しく BIOS/ファームウェアのアップデートのシナリオが追加されます。

5.3 シナリオ実行

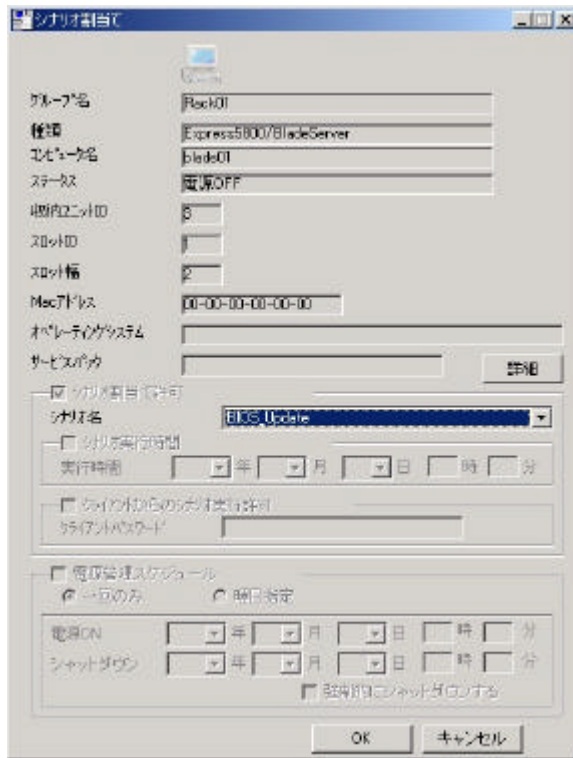
BIOS/ファームウェアのアップデートのシナリオ実行について説明します。


(1) 以下のいずれかの方法で作成したシナリオファイルをコンピュータに割り当てます。

- イメージビューまたは、ツリービューからコンピュータアイコンをクリックし、[コンピュータ] メニューから [シナリオ割当て] を選択します。
- コンピュータアイコンを右クリックし、[シナリオ] [シナリオ割当て] を選択します。
- メイン画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、 アイコンをクリックします。
- シナリオビューでシナリオファイルを選択し、ツリービューまたは、イメージビューのコンピュータアイコンにドラッグ&ドロップをして割り当てます。

(2) シナリオ割当て画面が表示されたら、下図のように青い部分のプルダウンから先ほど作成したシナリオファイルを選択し、[OK] を押します。これで、コンピュータへのシナリオ割当てが完了です。

(例) シナリオファイル “ BIOS_Update ” のシナリオ割当ての例



- (3) シナリオを割り当てたコンピュータをクリックし、[コンピュータ]メニューから [シナリオ実行] を選択します。ただちにシナリオが開始されます。同じ操作をコンピュータアイコンを右クリックし、[シナリオ] [シナリオ実行] を選択しても行えます。また、メイン画面のイメージビューでコンピュータアイコンを選択し、アイコンをクリックしても同様の操作が可能です。
- (4) イメージビューの [ステータス] 欄に “シナリオ実行中” と緑色に表示され、シナリオ実行しているコンピュータの電源が自動的に立ち上がり、BIOS/ファームウェアのアップデートを行います。
- (5) メニュー画面の [表示]メニュー [シナリオ実行状況] [シナリオ実行一覧] を選択し、[シナリオ実行一覧] 画面を表示します。
- (6) [シナリオ実行一覧] 画面の [進行状況] に “正常終了” と表示されたら、シナリオは完了です。

注意

実行するコンピュータの BIOS のバージョンが同じものを配信すると、アップデート中にエラーになってしまいます。シナリオを実行する際は、配信する BIOS のバージョンにご注意ください。

応用編

DPM の各種応用機能について説明します。

1. クライアント情報一括登録

ここでは、コンピュータの情報を一括で登録する方法（インポート）と、登録されたコンピュータの情報を CSV ファイル形式で出力する方法（エクスポート）について説明します。

重要

ICMB 接続されているグループが存在する場合は、インポートおよびエクスポートを実行することができません。一旦、ICMB 解除を行ってからインポートおよびエクスポートを行ってください。

1.1 コンピュータ情報インポート

以下の手順でインポートファイルを作成してください。インポートファイルの拡張子は「.CSV」と指定してください。

- (1) 各クライアントの情報を記述した CSV ファイルを、以下のフォーマットで作成する。

CSV ファイルの 1 行目は固定で、2 行目以降にクライアントの情報を記述してください。

CSV ファイルのフォーマット

```
"コンピュータ名","グループ名","MAC アドレス","収納ユニットID","スロットID","シナリオ割当許可","スロット幅"  
"1 台目のコンピュータ名","グループ名","MAC アドレス","収納ユニットID","スロットID","シナリオ割当許可","スロット幅"  
"2 台目のコンピュータ名","グループ名","MAC アドレス","収納ユニットID","スロットID","シナリオ割当許可","スロット幅"  
.  
.
```

ヒント

- コンピュータ名が“COMP1”、“COMP2”の 2 台のコンピュータの情報を登録する CSV ファイルは、以下のようになります。（所属するグループが“COMP1” “COMP2”は「Express5800/BladeServer」の場合）

```
"コンピュータ名","グループ名","MAC アドレス","収納ユニットID","スロットID","シナリオ割当許可","スロット幅"  
"COMP1","#BLADE-GROUP","00-11-22-33-44-55","1","1","1","2"  
"COMP2","#BLADE-GROUP","00-11-22-33-44-66","1","3","0","2"
```
- CSV ファイルの 1 行目はコメント行です。必ず記述してください。
- 2 行目のデータから処理を行います。
- グループ名の前には「#」を付けてください。グループ名が「BLADE - GROUP」の場合、CSV ファイル上では「#BLADE - GROUP」となります。
- 同一 CSV ファイル内に、複数グループが混在していても登録可能です。
- シナリオ割当許可は、許可する場合は「1」を、許可しない場合は「0」を設定してください。指定しなかった場合は許可となります。

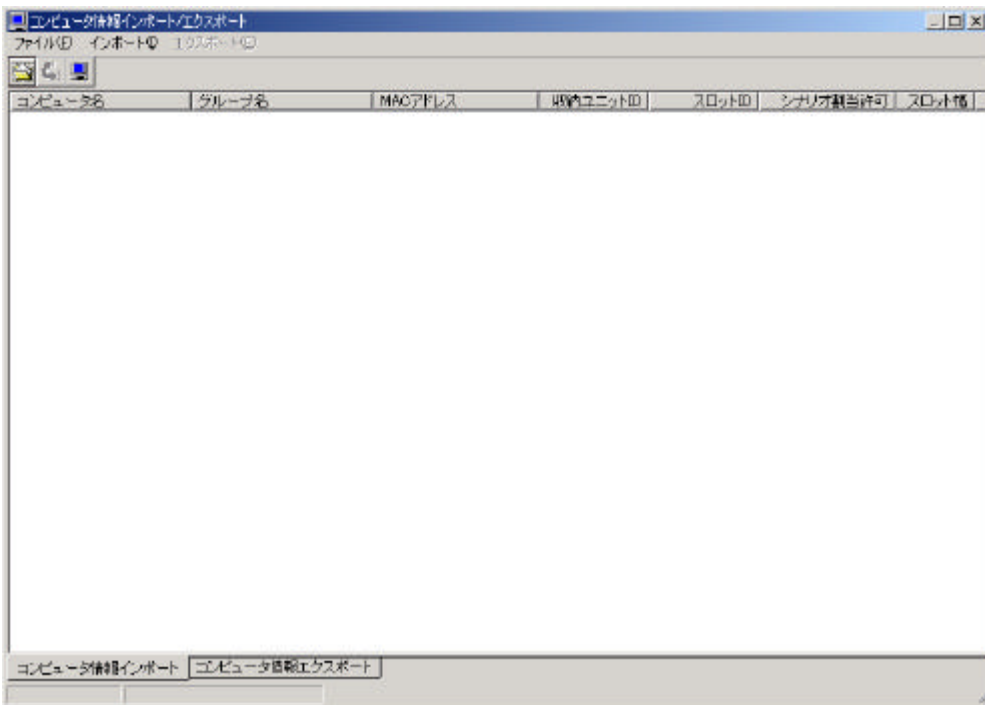
- スロット幅には、使用するCPUブレードの使用スロット数を指定してください。指定しない場合は、スロット幅は「2」として登録されます。
- 「」を含む文字列を指定する場合には、文字列を「」で囲まないでください。
- 「コンピュータ情報エクスポート」で出力した CSV ファイルを使用した登録も可能です。

(2) 登録するコンピュータを追加するグループが作成されていない場合は、グループを作成する。

ヒント

- 収納ユニットは存在しない場合、自動的に登録されるので作成する必要はありません。

(3) [ファイル]メニューから、[コンピュータ情報インポート/エクスポート]を選択する。



[コンピュータ情報インポート/エクスポート]画面が表示されます。


(4) 画面下方の[コンピュータ情報インポート]タブをクリックする。

(5) [ファイル]メニューから、[インポートファイル読込]を選択する。

画面が表示されるので、作成した CSV ファイルを選択する。

CSV ファイルの内容が画面に表示されます。

ヒント

-  アイコンを選択しても、画面を表示できます。
- CSV ファイルを画面上にドラッグ&ドロップしても、CSV ファイルを読み込むことができます。
- [インポート]メニューから、[表示情報のクリア]を選択すると、一覧に表示している内容をクリアできます。

(6) [インポート]メニューから、[インポート実行]を選択する。

[メインウィンドウ]画面にコンピュータの情報が登録されます。

ヒント

 アイコンを選択しても、コンピュータの情報を登録できます。

(7) [ファイル]メニューから、[終了]を選択する。

[コンピュータ情報インポート/エクスポート]画面が終了します。

以上でコンピュータ情報のインポート作業は完了です。

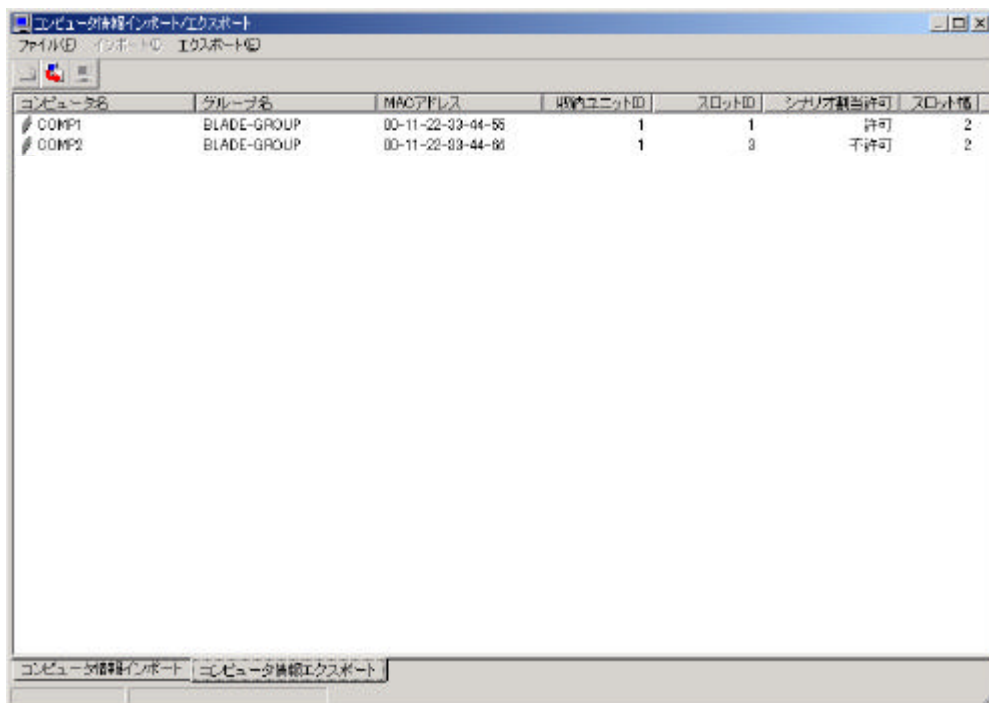
1.2 コンピュータ情報エクスポート

以下の手順でコンピュータ情報のエクスポートを行うことができます。

[ファイル]メニューから、[コンピュータ情報インポート/エクスポート]を選択する。

[コンピュータ情報インポート/エクスポート]画面が表示されます。

(1) [コンピュータ情報エクスポート]タブをクリックする。



画面に登録されているコンピュータの一覧が表示されます。


ヒント

[エクスポート]メニューから、[最新の情報に更新]を選択すると、表示内容を最新の状態に更新できます。

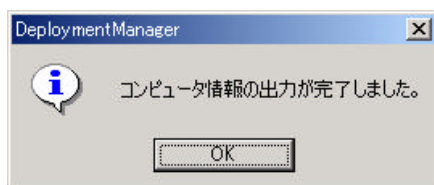
(2) [エクスポート]メニューから、[エクスポート実行]を選択する。

画面が表示されるので、出力する CSV ファイル名を指定する。

ヒント

 アイコンを選択しても、コンピュータの情報を出力できます。

(3) 出力完了メッセージ画面が表示されるので、[OK]をクリックする。



(4) [ファイル]メニューから、[終了]を選択する。

[コンピュータ情報インポート/エクスポート]画面が終了します。

以上でコンピュータ情報のエクスポート作業は終了です。

2. 情報ファイル大量作成アシスト

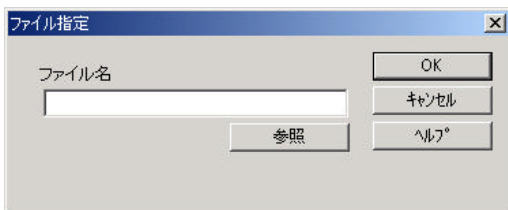
OS クリアインストールを多数のコンピュータに実行する場合は、使用する情報ファイルを多数に作成する必要があります。しかし、1つ1つ作成したのでは時間が大量にかかってしまいます。DPM は情報ファイルを簡単に大量に作成する機能を有しています。ここでは、OS クリアインストール用の情報ファイルの大量作成方法について、説明します。

- (1) 大量の情報ファイルを作成する元となる、情報ファイルを用意します。

ヒント

セットアップパラメータファイルの作成方法は、「基本操作編」の「1. OS クリアインストール」の「1.2 セットアップパラメータの作成」を参照してください。

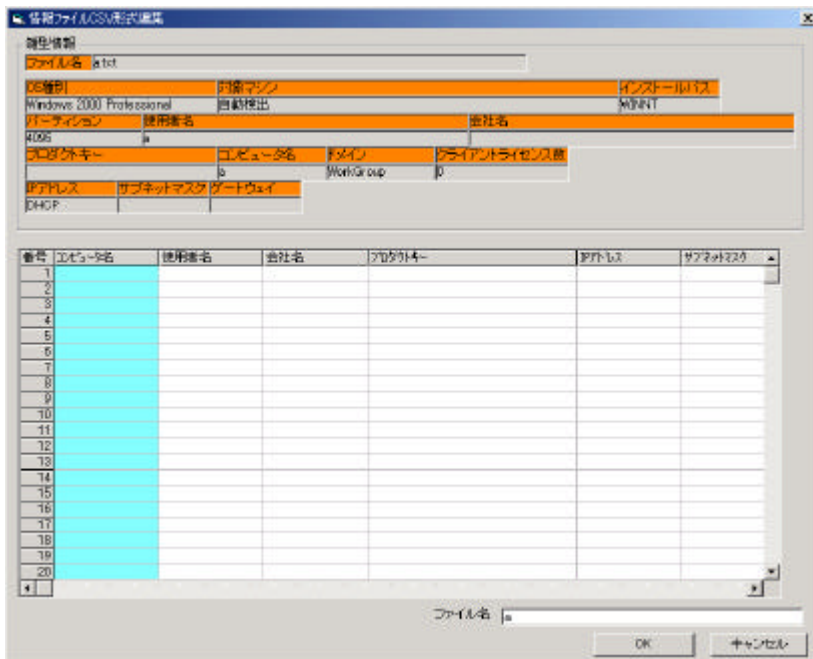
- (2) [イメージビルダー] [セットアップパラメータファイルの作成] を選択し、[セットアップパラメータファイルの作成] 画面の [オプション] メニューから、[情報ファイル大量作成アシスト] の [情報ファイル CSV 形式出力] を選択します。[ファイルを開く] 画面が表示されます。



- (3) [ファイルを開く] 画面で、(1) で用意したパラメータファイルを指定します。[ファイルの指定] 画面が表示されます。
- (4) 保存する CSV ファイル名を指定して、[OK] をクリックします。CSV 形式の情報ファイルが作成されます。
- (5) [セットアップパラメータファイルの作成] 画面の [オプション] メニューから、[情報ファイル大量作成アシスト] の [情報ファイル CSV 形式編集] を選択します。[ファイルを選択してください] 画面が表示されます。



- (6) [ファイルを選択してください] 画面で、(4) で作成した CSV ファイルを指定します。[情報ファイル CSV 形式編集] 画面が表示されます。



- (7) 情報ファイルを作成したいコンピュータの数だけ情報を入力し、[OK]をクリックします。CSV形式の情報ファイルが編集されます。

ヒント

- コンピュータ名は必ず入力してください。
- ファイル名はデフォルトで(4)で作成したCSVファイル名になります。この画面での変更内容は、このファイル名で保存されます。別のファイル名で保存したい場合は、[OK]をクリックする前に変更してください。
- ここで編集するCSVファイルは、直接ファイルを編集することも可能です。
- 一度に登録できる件数は、100件までです。100件を超えて登録する場合は、(4)で別のCSVファイル名を指定して再度設定してください。

- (8) [セットアップパラメータファイルの作成]画面の[オプション]メニューから、[情報ファイル大量作成アシスト]の[情報ファイル大量作成]を選択します。[ファイルを開く]画面が表示されます。

- (9) [ファイルを開く]画面で、(7)で編集したCSVファイルを指定します。[大量情報ファイル作成結果]画面が表示され、作成結果が表示されています。CSVファイルに登録されていたコンピュータの数だけ、ディスク複製用情報ファイルが作成されます。

ヒント

[大量情報ファイル作成結果]画面に、「情報ファイルの作成に失敗しました。」と表示された場合は、[エラー情報表示]をクリックしてください。エラーについての詳細な情報が表示されるので、その内容にしたがってCSVファイルを修正後、再度実行してください。

以上で、情報ファイルの大量作成は完了です。

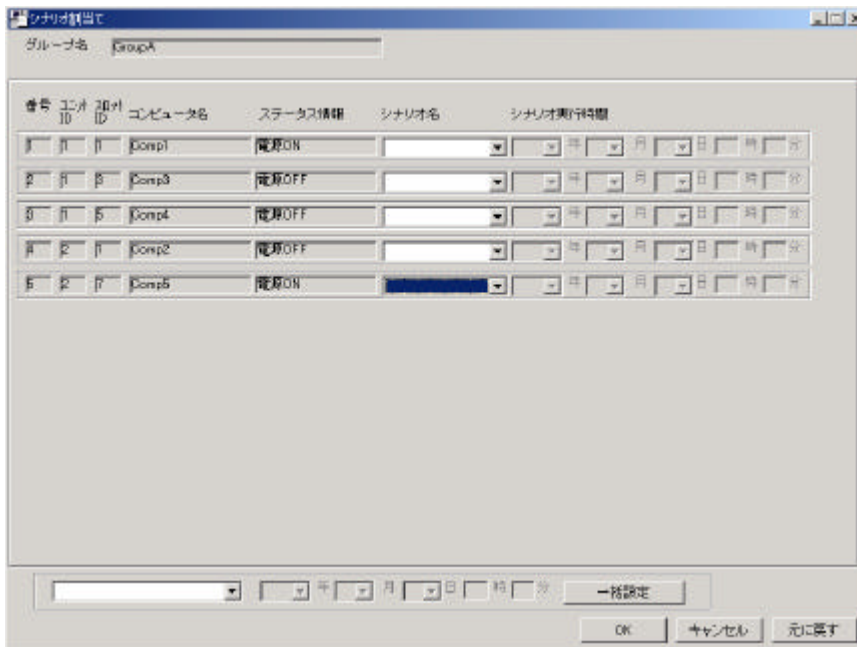
3. シナリオ一括設定

シナリオ一括設定機能を使うことによって、コンピュータに対して、グループ毎に一括してシナリオ割当て、シナリオ解除、シナリオ実行、シナリオ実行中断、電源 ON、シャットダウンを行うことができます。多台数のコンピュータに対して、シナリオ実行をしたいときなどに有効です。

3.1 シナリオ一括割当て

グループに登録されているコンピュータに対して、一括してシナリオを割当てることができます。

- (1) ツリービューから、一括してシナリオを割り当てたいグループを選択します。
- (2) 選択したグループを右クリックし、[一括設定] [シナリオの割当て] を選択します。[シナリオ割当て] 画面が表示されます。



- (3) コンピュータの [シナリオ名] ボックスの をクリックし、表示されたシナリオから割当てるシナリオを選択します。

ヒント

- [一括設定] を使用すると、グループに登録されているコンピュータに対して、すべて同じ設定を行うことができます。
- [元に戻す] を使用すると、[シナリオ割当て] 画面初期表示時の設定状態に戻ります。

注意

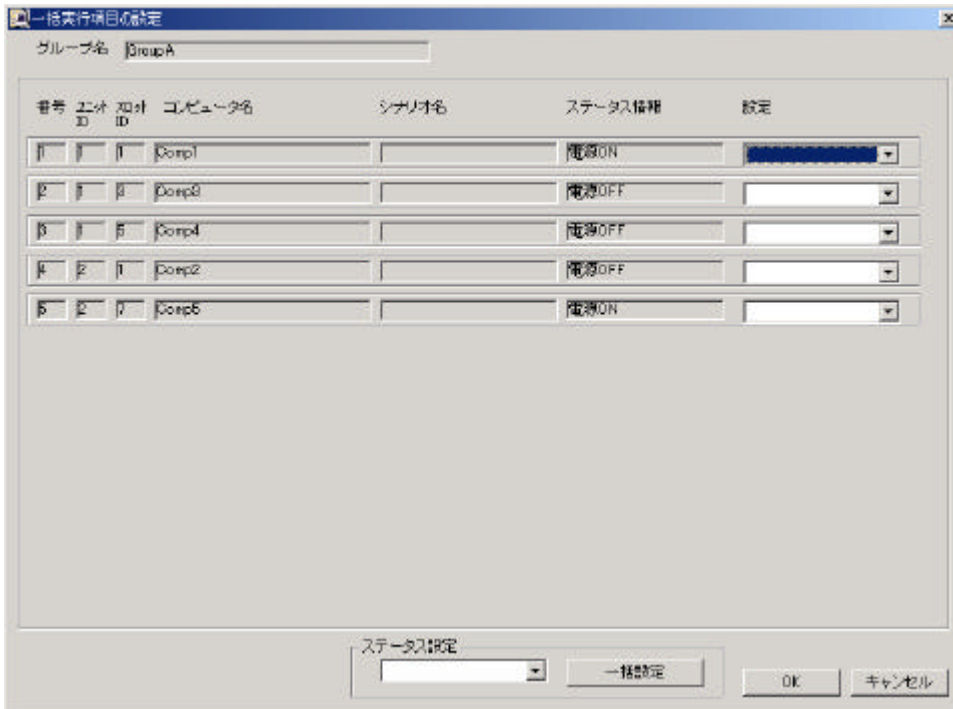
シナリオ実行時間は指定することはできません。

- (4) [OK] をクリックする。シナリオ割当て完了となります。

3.2 シナリオ一括実行

グループに登録されているコンピュータに対して、一括して実行項目の設定を行うことができます。

- (1) ツリービューから、一括実行を設定したいグループを選択します。
- (2) 選択したグループを右クリックし、[一括設定] [実行項目] を選択します。[一括実行項目の設定]



画面が表示されます。

- (3) グループに登録されている各コンピュータの、設定（電源 ON、シャットダウン、シナリオ実行、シナリオ実行中断）を選択し、[OK] をクリックする。

ヒント

- [コンピュータ名] [シナリオ名] [ステータス情報] は変更できません。
- [一括設定] を使用すると、グループに登録されているコンピュータに対して、すべて同じ設定を行うことができます。
- ステータス情報とシナリオ割当てによっては設定できない場合もあります。

- (4) 以上で、シナリオ一括実行の設定が完了です。設定した実行項目が開始されます。


4. シナリオ作成時のオプション設定

シナリオファイルを作成する際には要求に応じて、いくつかのオプションを設定することができます。マルチキャストを使うシナリオを複数同時に実行するときなどには、オプション設定をしなければならないことがあります。

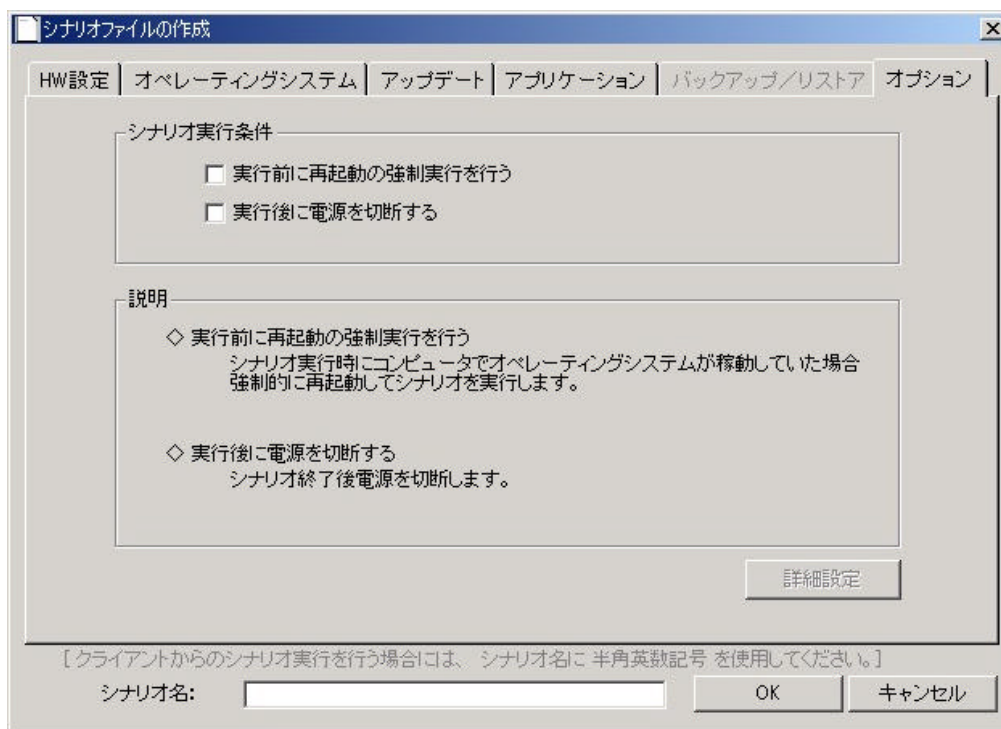
4.1 シナリオ実行条件

ここでは、シナリオを実行する前と後でコンピュータの電源の状態をどのようにするかを決めることができます。設定は、[シナリオファイルの作成]画面や[シナリオファイルの修正]画面から行います。

- (1) メイン画面の[シナリオ]メニューから[シナリオファイルの作成]を選択し、[シナリオファイルの作成]画面が表示させ、各項目をご希望の用途に合わせて設定します。[シナリオファイルの作成]

画面は、メイン画面の  アイコンをクリックしても、同様の操作が可能です。

- (2) [オプション]タブをクリックします。下図が表示されます。



- (3) [シナリオ実行条件]で「実行前に再起動の強制実行を行う」と「実行後に電源を切断する」から選択して、ご希望に応じてチェックボックスにチェックを入れます。両方にチェックを入れることもできます。

ヒント

各項目の説明は以下のとおりです。

- 「実行前に再起動の強制実行を行う」
シナリオ実行前にコンピュータでオペレーティングシステムが稼動していた場合、強制的に再起動してシナリオを実行します。
- 「実行後に電源を切断する」
シナリオ実行終了後電源を切断します。

注意

コンピュータが OS を起動しているときに、シナリオを実行する場合は、必ず「実行前に再起動の強制実行を行う」にチェックを入れてください。ただし、リモートアップデート（単独でのサービスパック/HotFix、アプリケーションインストール）では、この設定は必要ありません。

ヒント

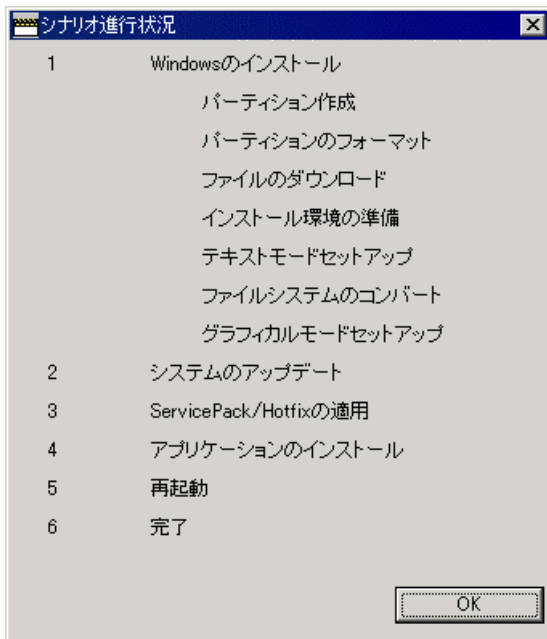
再起動を行うためにはクライアントコンピュータにDPMのサービスがインストールされている必要があります。詳しくは「基本操作編」4. サービスパック/HotFix、アプリケーションのインストール」の「4.1 サービスのインストール」をご覧ください。

5. シナリオ実行状況確認

シナリオを実行中、その進捗を確認することができます。ここでは、シナリオ実行一覧等、シナリオ実行状況を表示する画面について説明します。

5.1 シナリオ進行状況

シナリオを実行中に、イメージビューのコンピュータアイコンを右クリックし、[シナリオ実行進行状況]を選択すると、[シナリオ進行状況]画面が表示されます。下図は、OS クリアインストール時のものです。シナリオが終了した項目には、? がつきます。



注意

- 実行中のシナリオによって、表示される項目は異なります。
- リストアのシナリオを実行中に [シナリオ実行進行状況] を選択すると、[バックアップ/リストア実行一覧] 画面が表示されます。詳細は、「応用編」「シナリオ実行状況確認」の「7.3 バックアップ/リストア実行一覧」を参照してください。

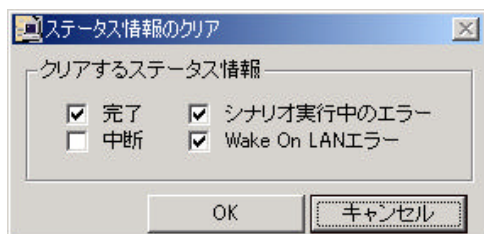
5.2 シナリオ実行一覧

[表示]メニューから、[シナリオ実行状況] [シナリオ実行一覧]を選択すると、[シナリオ実行一覧]画面を表示します。

コンピュータ名	MACアドレス	グループ名	シナリオ名	実行ステータス	進行状況
Comp-1	00-30-11-05-77-b2	Group-A	mp-bak	バックアップ実行中	45%
Comp-2	00-30-11-24-79-90	Group-A	comp2-bak	実行完了	100%
Comp-3	00-30-11-32-03-1e	Group-A	mklpd-sp2	実行完了	100%

シナリオ実行一覧は以下の機能があります。

- 最新の情報に更新（F5 キーでも更新できます）
 [ファイル]メニューから、[最新の情報に更新]を選択すると、画面表示を最新の状態に更新します。
- ステータス情報のクリア
 [ファイル]メニューから、[ステータスの一括クリア]を選択すると、クリアするステータス情報を選択する画面が表示されます。クリアするステータスを選択して、[OK]をクリックすると、選択したステータス情報が削除できます。



- 表示
 表示する情報ステータスを絞り込んで表示します。
 [表示]メニューから [全て表示する] [常ステータスのみ表示する] [異常ステータスのみ表示する] の3種類が選択可能です。

5.3 シナリオ実行結果一覧

[表示] メニューから、[シナリオ実行状況] [シナリオ実行結果一覧] を選択すると、[シナリオ実行結果一覧] 画面を表示します。

種類	日付	時刻	MACアドレス	シナリオ名
実行開始	2002/10/15	11:38:21	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行完了	2002/10/15	11:40:21	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行開始	2002/10/15	11:59:04	00-30-f1-2b-8b-d5	AP.snr
実行中断	2002/10/15	11:59:21	00-30-f1-2b-8b-d5	AP.snr
実行開始	2002/10/15	12:00:04	00-02-55-8f-97-f1	AP.snr
実行完了	2002/10/15	12:13:20	00-02-55-8f-97-f1	AP.snr
実行完了	2002/10/15	12:14:18	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行開始	2002/10/15	13:55:37	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行中断	2002/10/15	14:29:02	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行開始	2002/10/15	14:29:10	00-02-55-8f-f1-8d	R-091.snr
実行完了	2002/10/15	14:31:59	00-02-55-8f-f1-8d	R-091.snr
実行開始	2002/10/15	14:37:17	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行完了	2002/10/15	14:38:33	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行開始	2002/10/15	15:15:07	00-02-55-8f-f1-8d	I-088-2KS.snr
実行完了	2002/10/15	15:28:05	00-02-55-8f-f1-8d	I-088-2KS.snr
実行開始	2002/10/15	15:52:40	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行中断	2002/10/15	15:52:52	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行開始	2002/10/15	15:58:22	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行完了	2002/10/15	16:10:52	00-02-55-8f-f1-8d	Linux.snr
実行開始	2002/10/15	16:38:32	00-c0-a8-fb-fd-37	Linux.snr
実行中断	2002/10/15	16:38:44	00-c0-a8-fb-fd-37	Linux.snr

この画面の機能は以下のとおりです。

- 最新の情報に更新 (F5 キーでも更新できます)
[ファイル] メニューから、[最新の情報に更新] を選択すると、画面表示を最新の状態に更新します。
- CSV 形式で保存
シナリオの実行結果を CSV 形式で出力します。[ファイル] メニューから、[CSV 形式で保存] を選択して、出力するファイル名を指定してください。
- ログファイルの削除
表示しているログファイルを削除します(実行中、エラー状態のシナリオがある場合は削除不可)。[ファイル] メニューから、[ログファイルの削除] を選択して、ログファイルの削除を行ってください。

6. 登録ツール

登録ツールを使用すると DPM に以下のモジュールを登録できます。

- AutoRaid
- OEM ドライバ
- システムのアップデート

注意

登録ツールを使用すると上記のモジュール全てが登録されるというわけではありません。登録ツールに対応した Express5800 シリーズの装置に必要なモジュールのみが登録されます。

上記のモジュールの登録方法について説明します。

- Express5800/BladeServer, Express5800/Na の場合、登録は EXPRESSBUILDER CD - ROM から行うことができます。EXPRESSBUILDER CD - ROM を挿入すると自動的に起動する「Master Control Menu」の「ソフトウェアのセットアップ」から、「アップデートモジュールの DPM の登録」を選択すると、登録を行うことができます。